

五山僧侶の漢籍読書傾向について

－明代の読書傾向と比較して－

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2014年3月

梁 雨薇

目次

1.はじめに	1
1.1 漢籍とその歴史	1
1.2 僧侶と漢籍の関係	1
1.2.1 歴史的な関係	1
1.2.2 明代の関係	3
2. 五山僧侶の漢籍読書	5
2.1 五山文化と五山僧侶	5
2.2『臥雲日件録抜尤』	6
2.2.1 日記とその作者	6
2.2.2『臥雲日件録抜尤』の中の漢籍	7
2.3『蔗軒日録』	11
2.3.1 日記とその作者	11
2.3.2『蔗軒日録』の中の漢籍	12
2.4『碧山日録』	16
2.4.1 日記とその作者	16
2.4.2『碧山日録』の中の漢籍	16
2.5『空華日用工夫略集』	19
2.5.1 日記とその作者	19
2.5.2『空華日用工夫略集』の中の漢籍	19
3. 明代の読書	24
3.1 明代の文化環境	24
3.2 明代の読書人と読書傾向	25
3.2.1 明代の読書人	25
3.2.2 明代人の読書傾向	26
3.3 明代僧侶の読書	31
3.3.1『山庵雑録』とその中の漢籍読書傾向	31
3.3.2『竹窓随筆』とその中の漢籍読書傾向	32
4. 五山僧侶と明代人の読書状況の比較	37
5. おわりに	40
参考文献	42

1. はじめに

1.1 漢籍とその歴史

漢籍とは和書に対応する用語であり、中国人が中国語によって、著作、編纂あるいは翻訳などをした書物である。簡単にいえば、中国人が中国語で書いた本と言っていいと思う。¹一般に四部分類では、仏典は四部釈家類に入るが、仏教内部においては、仏教書は内典といい、そのほかの書籍は一括して外典に含める。²

日本人が読んでいる漢籍を研究するためには、その歴史を知る必要がある。『古事記』、『日本書紀』には漢籍が初めて日本に入ったことについて、『古事記』では和邇吉師、『日本書紀』では王仁と標記される文首の祖先が、応神天皇の時代に、百済から『論語』と『千字文』が伝えられたという。³

中国が隋朝に入ったころ、日本は聖徳太子の時代であった。隋唐統一帝国と、良好な関係を築くために、日本側は積極的に公式の使節と留学生・留学僧を送り出した。多くは二年程度の滞在で帰国するが、中には何十年も中国に留まるものもあり、多くの帰国者は官界や宗教界で指導的な立場に立った。⁴彼らは仏典を含む典籍を請来し、学問著作に利用した。嚴紹湯先生は「聖徳太子の憲法十七条と冠位十二階の中の条文は、中国經典を引用している」⁵と指摘されている。

唐宋の時、日中両国の交流が盛んになり、日本から多くの留学生や留学僧が中国に渡った。彼らは帰国する時に様々な中国の文物を日本に持ち帰り、その中には典籍も含まれていた。貿易船が入港する港が複数あり、記録も少ないため、船載されている中国書籍の状況について把握するのは非常に難しいが、幸いこの時期の高級公卿の日記の中にある漢籍に関する記事を拾うことで、その伝来の状況について知ることができる。⁶そして唐が滅亡してから間もない宋の初期のころには、日本は藤原氏の隆盛の時期になる。この時期の藤原氏の日記の中には漢籍に関する記録が多く存在している。たとえば、大庭氏の著書には、例えば、藤原道長の『御堂関白記』によれば、寛弘三年（一〇〇六）に彼らは宋商人から『六臣注文選』と『白氏文集』が贈られた。…⁷などがある。本研究においても、僧侶の日記から漢籍読書に関する記事を抽出し、当時の明代の状況との比較を試みたい。

1.2 僧侶と漢籍の関係

1.2.1 歴史的な関係

前節で述べたように、隋朝から以降中国に渡った日本人たちは、中国の先進的な文化を

¹ 東京大学東洋文化研究所図書室編. 『はじめての漢籍』. 汲古書院, 2011, p6.

² 大庭脩・王勇. 『日中文化交流史—典籍大修館書店』. 大修館書店, 1996, p24-26.

³ 同上.

⁴ 同上.

⁵ 嚴紹湯. 『漢籍在日本的流布研究』. 江苏古籍出版社, 1992, p14-23.

⁶ 大庭脩・王晓秋. 『日中文化交流史—歴史』. 大修館書店, 1995, p206-230.

⁷ 大庭脩・王勇. 『日中文化交流史—典籍』. 大修館書店, 1996, p47.

吸収し、たくさんの中国の典籍を日本に請来した。推古天皇の時代に遣隋使とともに隋朝に渡った八人のうち、僧は一人だけであり、そのほかは士人だった。すなわち奈良時代から平安時代にかけて、士人と僧侶の両方が学問の為に入唐していた。士人で中国に渡航して学び、典籍を導入した人間といえば、吉備真備がその筆頭にあがるだろう。吉備真備は天平七年三月、玄昉とともに中国に留学して、多くの漢籍を請来した。彼には『新唐書』の日本伝の中で、開元のはじめに渡来して「得る所の錫賚を尽くして文籍に市えた」といわれる人物だ。⁸中国に渡った仏僧は数多くいるが、その中で漢籍請来の記録を残したのは、最澄、空海が挙げられる。彼らを始めとして、入唐僧には請来目録が残されている。国費で入唐した留学僧たちは請来した漢籍をリストして、朝廷に提出しなければならなかった。現存している目録は漢籍伝来の重要な研究資料として認められている。平安時代以降、中国に渡る人は次第に士人が減って僧侶が多くなる。国風文化が栄える中でも、新しい仏学を求める宗教的熱情はおとろえなかった。

奈良時代、平安時代に帰朝した吉備真備と玄昉は、共に霊亀七年に第八回遣唐使に従って入唐し、二十年以上してから帰ってきたのであるが、玄昉は内典、吉備真備は外典を持ち帰ることになっていた。ところが、士人がいなくなり仏僧だけの入唐となると、外典は誰が持ち帰るかという問題が出てきた。

大庭氏の著書では、最澄の請来目録についても、「その請来目録について多少調べてみよう。まず伝教大師最澄の場合である。伝教大師請来目録、つまり『日本国求法僧最澄目録』は「総合二百三十部四百六十巻」とし、向田台州求得法門都合一百二十八部百四十五巻名目別録、向越州取本写経并念誦法門都合一百二部百十五巻とし」⁹と述べている。請来目録の最後に十五冊ぐらいの外典が記録されていることを指摘している。さらに空海については、「空海の請来目録では、新訳経都一百四十二部二百四十七巻、梵字新言讚等都三十二部一百七十巻、論疏経章等都三十二部四百六十一巻、已上三種惣二百一十六部四百六十一巻となっており…」¹⁰と述べ、外典については最末尾には八冊があり、外典も少し持って帰ったことを指摘している。その後、円仁や円珍が持ち帰った典籍も同様に、大部分は内典で、外典はわずかである。次の時代に典籍をもたらしたのは入宋僧であり、その中で奄然、成尋は大蔵経を日本にもたらし、これは日本の仏教界にとって一番重要なことである。宋末に円爾弁円が帰国する時、内典・外典数千巻を持ち帰った。その目録の内容は同様に大庭氏の著書によると、「何といってもこの目録は、概略内典の二六〇部に対して外典一〇〇部を含んでいることが最も注目すべきで点で、三割たらず外典とは、今まであげた請来目録には身らぬバランスであって、円爾弁円将来書の大きな特色である。しかしこれは、円爾弁円の個人特色というよりも、この時期以後の入宋、入元僧の特色であり、さ

⁸ 大庭脩・王勇、『日中文化交流史—典籍』。大修館書店、1996、p13.

⁹ 大庭脩、『漢籍輸入文化史—聖徳太子から吉宗へ』。研文出版、1997、p65.

¹⁰ 同上、p67.

らに言葉を変えて言えば禅僧の一般教養の特色ともいえるのではなかろうか…。円爾弁円の請来目録には、五経、朱子学の書、老荘、兵家、小学、文選、白氏文集、韓・柳文等のほか、医書類や本草もかなりある。」¹¹と述べた。宋が滅亡して元になっても、入元僧の数は減らず、二百二十人余りいた。しかし、一人ひとりの行動についての資料はあまり残っていない。

このように、たくさんの漢籍が僧侶によって日本に伝来した。僧侶の中でも特に五山の僧侶たちは、自身の教養のため、或いは国家政治のためにたくさんの漢籍を読んだ。彼らが読んだ漢籍では仏教書だけではなく、外典の割合が徐々に増えていった。

1.2.2 明代の関係

嚴紹湯先生はかつて日中漢籍交流を四種類に分けた。一つは人の間の交流、時間は六世紀から八世紀まで。二つは貴族文人を主体とした交流、時間は八世紀から十二世紀まで。三つは禅僧を主体とした交流、時間は十三世紀から十六世紀まで。四つは貿易を目的とした伝播方式、時間は十七世紀から十九世紀まで。本研究で主として扱う時期は第三時期禅僧を主体とした時期である。¹²日本の室町時代は、中国では明代に入っており、両国とも禅宗が流行していた。日本では漢文学を支えていたのは五山文化である。五山僧侶は文化人として世間に尊敬されていた。

この時期、日本では禅宗と幕府が密接に関わっており（2.1 で詳述する）、中国でも禅僧が重視されていた。明代の禅僧は、皇帝と政治的に極めて深い関係を持っており、大慧派の禅僧はその中心であった。仏教が盛んな地域へ仏僧を使者として派遣していたのである。これは相手国に対する一種の懐柔であり、僧侶を通じて当時の朝貢貿易を促進するように試みたのである。¹³このようなことから、両国の交流の任務は僧侶たちに任された。この時代に中国に渡った日本の僧侶は入明僧と呼ばれる。漢文学家としての彼らの請来品の中にはもちろん漢籍があったと考えられる。これは、禅僧たちの個人行動ではなく、大庭氏が「寛正五年、遣明使に託して足利義政が明に書籍を求めため、必要な日本未渡の書名や、希有の目録呈示するように命じられて…」¹⁴と述べられていたように、日本の幕府や朝廷も中国の書籍を求めており、禅僧たちは彼らの要求に応える役目も持っていた。

前述したように、この時代に中国と直接の交流が多くあったのは五山僧侶だったが、彼らの請来目録はほとんど残っていない。しかし、五山僧侶の日記には、漢籍に関する記事が多く存在している。例えば、大庭氏の『漢籍輸入文化史-聖徳太子から吉宗へ』では、室町時代の外交文書集『善隣国宝記』の作者瑞谿周鳳の日記『臥雲日件録』には「宝徳元

¹¹ 大庭脩. 『漢籍輸入文化史-聖徳太子から吉宗へ』. 研文出版, 1997, p72.

¹² 严绍盪. 『漢籍在日本的流布研究』. 江苏古籍出版社, 1992, p14-23.

¹³ 伊藤幸司. 「外交と禅僧--東アジア通交圏における禅僧の役割」. 『中国-社会と文化』. 中国社会文化学会, 2009, p41-70.

¹⁴ 大庭脩・王勇. 『日中文化交流史-典籍』. 大修館書店, 1996. p66.

年(1449)九月十八日には、天英周賢が『百川学海』二冊を持参して貸覧したことを書き、この書は永享の初に大明から渡来したが、全冊は未だ来ず、三分の一が来ているのみで、希世靈彦が持っていて、鹿苑院に居る時一冊ずつ借りてみたという¹⁵とある。そのほかにも、同じ大庭氏の著作の中で、『蔗軒日録』の文明十六年四月二日の記事には、「元史の趙子昂、黄晉卿、掲饅碩等の列伝を読んだとあり、趙子昂の人気を窺える。」¹⁶とある。

このように「何の書物を読みたいか」、「今日、なんの書物を読んだのか」に関する記録は、彼らの日記から多く確認できる。本研究は始めに五山僧侶の日記から出てくる漢籍を抽出し、整理・分類する。また明代の知識人の読書状況と比較して、日本の五山僧侶の漢籍の読書の傾向を明らかにしたい。

本研究は五山文学が隆盛した百年間を研究範囲として、瑞溪周鳳の『臥雲日件録拔尤』、季弘大叔の『蔗軒日録』、雲泉太極の『碧山日録』、義堂周信の『空華日用工夫略集』を対象として、これらの日記の中の漢籍を分類する。そして、明代の読書状況については、雲棲株宏の『竹窓随筆』と怒中無愠の『山庵雜録』を対象として、同じ作業を行う。また明代の読書人の読書状況を加えて論じたい。

¹⁵ 大庭脩. 『漢籍輸入文化史-聖徳太子から吉宗へ』. 研文出版, 1997, p79.

¹⁶ 同上.

2. 五山僧侶の漢籍読書

2.1 五山文化と五山僧侶

五山文化とは、室町時代に盛んであった漢文学で、僧侶、具体的にいうと臨済宗僧侶であり、その中でも五山派といわれる宗派に属する禅僧によって創作された漢詩文のことを指す言葉である。¹⁷五山とは鎌倉から室町において、幕府や朝廷が認定した臨済宗の主要寺院のことである。幕府の外交政策とその実務運営などを担い、また漢詩文に代表される文化面でも当該時期を象徴する施設であった。¹⁸五山は幕府の権利と密接にかかわり、また当時の文化の各方面から領導する役割を果たしていたといわれる。

五山文学の主体である五山文化の元祖は一山一寧といわれる。一山は、学識が豊かで、公卿の中にも禅宗を信仰し、一山を崇拝している人が多い。五山文学を通観すると、初期は文学、後期は講学が主流をなすと言われていたが、玉村竹二氏によると、五山文学の系譜は以下の三つがある。玉村氏は「一つ目が宋朝系である。その代表人物は雪村友梅、虎関師練などである。その特徴は古典主義である。宋朝系の人たちは漢詩の詩形が多種に涉り、寧ろ長大な古詩や賦体などが多く。そのほか、禅僧は内外典の学的研究を兼ねる。二つ目は元朝系(古林派)で、その代表人物は古林清、清拙正澄、竺仙梵遷である。特質は体裁が仏教の領域を逸脱せず、掲頌という形を取り、表現的には純文学ではない。三つ目は明朝系(大慧派)である。その代表人物は絶海中津、中巖園月である。特質は禅林の実用文書作成に際して、四六文体の使用を徹底しており、また貴族社会の社交手段或いは教養として純文学の賞玩である。」¹⁹と述べていた。

それでは、なぜ五山僧侶は漢文学を熱心に読んでいたのだろうか。日本の僧侶は中国の禅を学ぶ時、漢籍を読まなければならなかった。玉村竹二氏は「日本人を烈しい漢文学熱に追詰めるべき必然的な要因が潜んでいたのである。それはとりもなおさず言語の問題である。禅宗が外国語の宗教である限り、多少に拘らず、禅宗の本処地の国語に通じなければならなかったのである。この外国語の問題は、日本の禅僧にとっては、相当の負担であったので、この言語の相違による差別感を懸命に除去しようとした結果が、あらぬ方向に走り、ついに文学熱にうかされるに至ったのである」²⁰と述べている。当時の中国の禅林では文学が流行していた。そのため、日本の僧侶が中国から伝わった禅書を読む際には、文学に接する機会が多かったのである。

室町時代に入ると、鎌倉五山や京都五山²¹で、幕府の外交文書を起草する必要性が出たことや、四六文を用いた法語や漢詩を作る才能が重視されたことも関係して、五山文学が

¹⁷ 玉村竹二. 『五山文学 - 大陸文化の紹介者としての五山僧侶の活動 -』. 至文堂, 1966. p1.

¹⁸ 小島毅. 「五山文化研究への導論」. 『中国 - 社会と文化』. 中国社会文化学会, 2009, p181-194.

¹⁹ 玉村竹二. 『五山文学 - 大陸文化の紹介者としての五山僧侶の活動 -』. 至文堂, 1966, p60-92.

²⁰ 同上, p168-175.

²¹ 鎌倉時代末期頃より幕府が制定した京都と鎌倉の寺院で構成される五山制度が変化して、室町時代に京都の南禅寺を別格上位とする京都五山と鎌倉五山の寺格が固定された。

栄えることとなった。

五山文化は日本の代表的な漢文化であり、五山僧侶は漢文化の専門家として世間に知られている。古い時代の漢籍を研究するためには、漢籍伝来目録や五山僧侶の日記を研究する方法はなく、この時代の目録はかなり少ないが、五山僧侶が残した日記をみると、漢籍の読書に関する記録がある。本研究は四つの日記を研究対象とし、五山僧侶の漢籍読書記録について分析を行う。

2.2 『臥雲日件録抜尤』²²

2.2.1 日記とその作者

『臥雲日件録抜尤』は日本室町時代（1392-1573）の禅僧瑞溪周鳳の日記で、室町時代末期に惟高妙安によって抜書きされたものである。元々の日記は『臥雲日件録』という名前であり、この「抜尤」は惟高妙安が抜書きした時加えたものと思われる。『臥雲日件録』は全部で七十四冊、文安三年から瑞溪周鳳が入滅した文明五年までを記録している。永禄五年、惟高妙安が抜書きして、世間に公開した。残念ながらその後、原資料は散逸してしまい、今は『臥雲日件録抜尤』だけが現存している。『臥雲日件録抜尤』は惟高妙安の関心によって抜書きされたもので、五山僧侶の逸話、名僧の追憶、当時禅林の活動だけを記録していた。²³

瑞溪周鳳は室町時代中期の臨済宗夢窓派の僧である。和泉国堺の出身で、諱は周鳳、字は瑞溪、臥雲山人とも称される。諡号は興宗明教禅師である。²⁴応永十三年に無求を師として出家した。応永二十年に師である無求が死んだため、その法を継承し、更に巖中周噩の下で修行した。季瓊真蘂の推挙によって6代將軍足利義教に拝謁してその文筆を高く評価され、永享八年に山城国景德寺の住持に任ぜられた。翌年十刹の一つである等持寺の住持となり、永享十一年に発生した永享の乱後の処理のために義教の命を受けて関東に下向している。永享十二年に相国寺第五十世住持となり、文安三年十月に相国寺鹿苑院院主兼僧録に任ぜられ、後に康正二年と応仁元年に再任し、死去までに通算三度務めた。八代將軍足利義政に重用され、文筆の才により室町幕府の外交文書の作成にあたった。²⁵

瑞溪周鳳の生涯を見てみると、彼は漢文学者と外交文書の作成者として、中国文化に一定の理解があると言える。彼が読んでいる漢籍はその時の日本の僧侶の状況を反映していると考えられる。次に、日記をもとに、彼が読んでいる漢籍をまとめ、分析する。

※これから列出した漢籍のリストは部類によって分類したリストだけで、出現回数が現れ

²² 『大日本古記録』 版本。

²³ 陈小法. 『明代中日文化交流史研究』. 商務印書館, 2011, p190-193.

²⁴ 同上.

²⁵ 同上.

てなかった。

2.2.2 『臥雲日件録抜尤』の中の漢籍

以下に列記する漢籍のリストは、種類によって分類したものである。出現の頻度は各リストの末尾に記す。

内典（仏典）時間	文献名
文安五年八月九日	續傳燈、密庵傳 大惠録
十一月二日	僧寶傳
寶徳二年四月十八日	續傳燈録
九月十九日	垂裕記
十二月八日	枯崖漫録
寶徳三年四月十七日	般若理趣分
八月十三日	清規百丈
十一月十七日	釋子蒙求、五燈會元、續蒙求
享徳三年八月九日	物初剩語
十月十五日	孟蘭盆經疏
十二月廿八日	尺氏要覽 大千録、弘決、宗鏡、釋門正統、叢林公論、外集書、竺元録
康正元年正月廿七日	雜毒海宗派圖
三月十一日	釋老志
四月廿九日	四十二章經
寛正元年二月七日	寶積經、法苑珠林、惠琳法師傳、法華經、梵網經、大般若
三月廿日	人天眼目
閏九月十日	大日經、蘇悉地經、金剛頂經
十一月十六日	新科注法華序
寛正四年三月廿九日	古林録拾遺
六月二十四日	應安録 叢林盛事
十月八日	五教章
十二月十六日	圓覺經、佛鑑、尺門正統
五月廿日	古尊宿録、隆興佛教編年通論
八月廿一日	三寶感應略録、林間録、禪林寶訓、佛祖歴代通載
寛正六年六月廿四日	日藏經、涅槃經
十一月廿三日	歴朝釋氏資鑑

文正元年九月廿四日 三寶感應要録、虎丘録、
 應仁元年六月十九日 古尊宿録 羅湖野録
 文明二年十月十一日 釋門正統、禪林類聚、釋氏資鑑、維廣經、諸經要集、
 法花疏記

日記から抽出できた内典は六十三部あった。出現頻度が高い文献は『傳燈録』十二回、
 『寶僧傳』十回、『法林珠苑』六回、『法華經』五回、『百丈清規』四回、『圓覺經』四回、
 『林間録』四回である。

外典：	時間	文献
経部：	文安五年八月九日	韻書
	寶徳二年四月五日	爾雅
	十二月八日	埤雅
	享徳三年七月廿九日	孟子
	長録元年二月三日	韓文考異
	長録三年十二月三十日	論語
	文正元年二月三日	四書大全、論語
	九月廿四日	尚書

経部には全部で十部ある。その中で出現頻度が高い文献は『孟子』五回、『論語』五回、
 『尚書』三回である。

史部：	寶徳三年四月十六日	史記 漢書
	享徳二年十一月九日	列女傳
	享徳三年七月廿九日	晉書
	十月十五日	文獻通考 左傳
	長録三年八月廿二日	後漢書
	寛正四年五月七日	貞観政要
	六月廿四日	十八史略
	十月廿六日	賓退録
	文明二年十月十一日	會稽志
	康正元年三月十一日	元史 全部四十冊

史部には十三部ある。その中で頻度が高い文献は『左傳』六回、『貞観政要』五回、『漢
 書』五回、『史記』三回である。

子部：文安四年二月廿日 太平御覽

寶徳元年十月二日	太平廣記
寶徳三年四月廿四日	夷堅志
享徳三年七月廿九日	歳時雜記、黄氏日抄
康正元年一月廿七日	圖畫見聞志
長録三年六月四日	春渚紀聞
寛正元年二月七日	海録碎事
五月七日	詩學大成
寛正四年十二月十六日	容齋續筆、
寛正五年八月廿一日	群書鈎玄
寛正六年六月廿四日	顔氏家訓 搜神記
十一月廿三日	類説
文明二年十月十一日	事文類聚
宝徳元年九月十八日	百川学海
宝徳三年十一月十一日	勸忍百箴考注二冊
康正元年三月十一日	南北演禽本 翰墨全書

子部には全部で十九部ある。その中で出現頻度が高い文献は『太平御覽』（類書）は八回、『歳時雜記』（百科類）四回、『顔氏家訓』（家訓類）四回、『太平廣記』（小説類）三回である。

集部：寶徳元年十月七日	文選
寶徳二年九月十九日	濬天淵文集
十二月八日	楚辭
寶徳三年七月十七日	山谷集
享徳二年九月十四日	白玉蟾文集
享徳三年七月廿九日	簡齋詩集、
十月十五日	東坡詩注
長録元年二月三日	杜詩千家、東坡注百家
十二月五日	黄晉卿文集 北磻文集
寛正元年二月七日	梅溪文集
十月十一日	劍南續稿
寛正三年四月九日	蘿山集
寛正四年五月七日	唐文粹
寛正五年五月廿日	詩人玉屑
寛正五年七月七日	黄文獻公集

八月廿一日	誠齋詩話
寛正六年七月四日	放翁集
十一月二十三日	詩學大成
應仁元年六月十九日	中興江湖集
文明二年十月十一日	文粹
享徳三年十二月廿六日	清江貝先生文集

集部には全部で二十四部ある。その中で出現頻度が高い文献は『文選』は五回、『北碕文集』四、『劔南續稿』四回、『梅溪文集』三回である。

以上に列記した漢籍は、先行研究である陈小法の『「臥雲日件録抜尤」與中日書籍交流』の中で列記された漢籍リストであり、それを本研究で再度分析を行った結果である。そのほかに、日記から書名を抽出しても、その内容・作者・年代が分からない文献は四部あった。

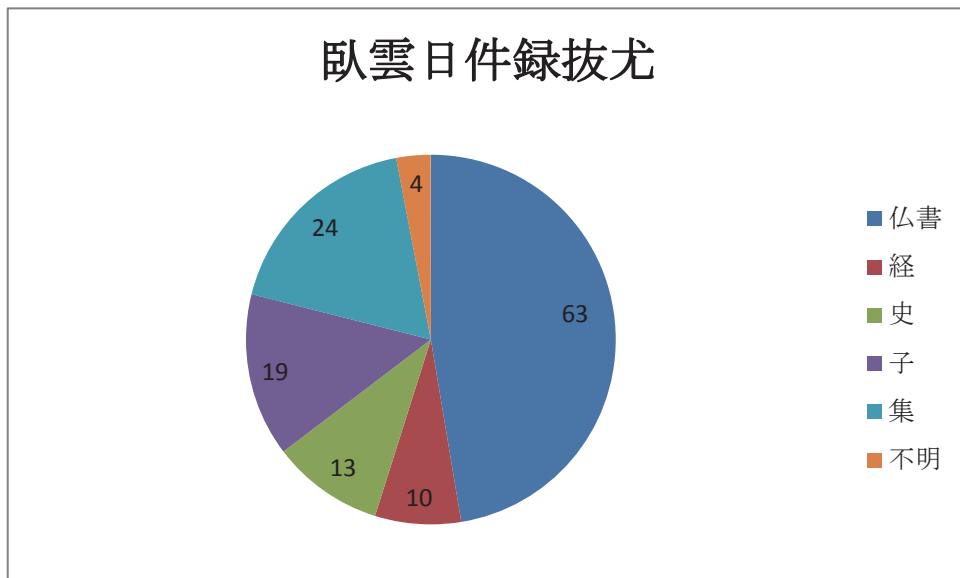


図 1

『「臥雲日件録抜尤」與中日書籍交流』は単に日記に現れた漢籍をリストし、どんな漢籍を、どんな方法で、だれによって、日本に伝わったかということ考察しているが、漢籍の読書傾向に関することはあまり述べていない。陳氏の先行研究では、五山僧侶の漢文読解について、漢文や用語などを理解するのに、苦戦している状況がよく見られる。五山僧侶は漢文学に関する造詣深かったが、必ずしも十分理解できていたわけではないようであると指摘している。たとえば、文安四年十二月廿三日の「九淵西堂來、茶話移刻。因及紅羅亭之事。十日前、九淵使某人就予求畫扇贊。扇面畫宮殿人物、前有紅梅樹株。某人曰：江南紅羅亭也。今問之九淵、則曰：未見所出。江西曾作此詩、亦未知所出。蓋南唐書中、

亦無此事。(九淵西堂が来て茶話に時を過した時、話が「紅羅亭」のことに及んだ。十日前に九淵は人をよこして私に扇賛を書いてくれるように求めた。扇面には宮殿・人物画がされており、前には紅梅の樹株があった。その人の言うには「江南の紅羅亭です」という。今このことを九淵に聞くと、「まだ出る所が分かりません」という。江西の詩人が嘗てこれに関する詩を作ったが、やはりその出どころがわからない。南唐書の中にも、このことは書かれていない」という文を引用し、「実際に「紅羅亭」は中国の各種類の文献の中で現れたことがある。たとえば『江南通志』で『紅羅亭在上元縣、古今詩話云：南唐後主建四面栽紅梅 作艷曲歌之。(紅羅亭は上元県にある、『古今詩話』は述べている、『南唐李後主が建て、周りに紅梅を植えて、詞を作って歌った』)と言っている」²⁶。九淵西堂と瑞溪周鳳は詩文の中の「紅羅亭」の出典が分かっていなかった。このように出典が分からない部分や解釈が誤っている部分がたくさんある。

本研究では、先行研究の中の漢籍読書のリストを参考とし、漢籍を分類し、分析によって、どのような傾向があることについて明らかにしたい。

『臥雲日件録抜尤』の漢籍読書リストと図1から見ると、五山僧侶は漢籍を多く読んでおり、経史子集の各部にわたっている。外典と内典の割合はほぼ等しい。仏僧たちは専門の仏典だけではなく、外典もたくさん読んでいる。そして、外典の中で集部が一番多い。集部の文献は大部分が文集であり、仏僧たちは文集に関心があることを明らかにした。その上で、儒学だけではなく、道家の文献も読んでいる。明代の時、『孟子』が日本に伝わってなったと言われているが、このリストから見ると、それは疑わしい。『孟子』は『臥雲軒日件録抜尤』によると、多く読まれていることが分かった。

2.3 『蔗軒日録』²⁷

2.3.1 日記とその作者

『蔗軒日録』は、室町中期の代表的な五山文学僧であり、東福寺住持であった季弘大叔が、晩年を過ごした堺の海会寺で記した日記である。文明十六年から十八年までの記事が現存している。彼の信仰や日常生活、東福寺を中心とする仏事・行事、応仁の乱後の畠山氏や京都の禅寺・禅僧の動向、堺の町や会合衆・遣明船の様子、連歌師宗祇・琵琶法師城菊ら文人との交遊などが記され、当時の社会状況を語る好史料である。²⁸

季弘大叔は室町時代の臨濟宗の僧で、備前の出身である。蔗軒、蔗庵、竹谷道人、備陽山人など多くの別号を持つ。九歳で竹庵大縁について出家、その法を継ぐ。応仁一年南都(奈良)で華嚴、法相両宗の教義を学び、文明六年京都に帰り東福寺の首座を勤めた。のち和泉(大阪府)海会寺の住持を経て、同十二年には東福寺の第174代住持となった。翌年退

²⁶ 陈小法. 『明代中日文化交流史研究』. 商務印書館, 2011, p220.

²⁷ 『大日本古記録』 版本.

²⁸ 陈小法. 『蔗軒日録』 与中日書籍交流. 『明代中日文化交流史研究』. 商務印書館, 2011, p239-274.

き、晩年は海会寺を中心に活動、臨済宗法燈派の人々とも多く交流した。このほか朱子学にも詳しく、浄土思想にも関心を示していたという。²⁹

2.3.2 『蔗軒日録』の中の漢籍

以下に列記する漢籍のリストは種類によって分類したもので、出現の頻度は各リストの末尾に記す。

内典（仏書）時間	文献
文明十六年四月十二日	景德傳燈録
四月二十四日	四教義
九月二日	扶宗集 林際録
九月十八日	續僧寶
文明十七年一月二日	翻譯名義集
一月五日	最勝王經
十月二十五日	梵綱經
十一月一日	法華經
十一月二十二日	天澤集
文明十八年 正月十九日	靈源卑語
二月六日	普賢行願書記 科住法華經
四月六日	百法問答
四月十八日	南堂録
八月十四日	佛說高王觀音經 興龍佛教編年通史
九月九日	靈源録
文明十六年 六月十一日	般若心經
文明十八年正月二十一	五重唯識章
文明十七年二月四日	首楞嚴經疏 五燈會元抄 鄂隱録 名義集 金剛經聖學指要
二月十日	太玄經 傳燈録
二月十二日	敕修百丈清規
文明十七年三月十八日	普燈録
四月二十一日	六物辯訛 佛制比丘六物圖
文明八年二月八日	禪林僧寶傳
二月十二日	注心賦
七月八日	愚迷發心抄

²⁹ 陈小法. 『蔗軒日録』与中日書籍交流. 『明代中日文化交流史研究』. 商務図書館, 2011, p239-274.

七月二十一日	禪林聚類
九月五日	观无量寿经疏
九月三十日	在先録
十月一日	早霖集 天賜詩 法事贊
十月三日	大藏經六義 群疑論 肇論
十一月八日	勝曼經有疏
文明十六年五月二十三日	六喻經
文明十八年三月二十一日	全室外集
八月二十五日	早霖集

この日記の中で内典は全部で四十八部、その中で出現回数が高い文献は『傳燈録』十回、『般若心經』十回、『百丈清規』八回、『法華經』六回、『百法問答』五回、『在先録』五回である。

外典

経部：時間	文献
文明八年二月八日	左傳
文明十六年四月二日	孟子私弟子傳
文明十七年十一月一日	大學
文明十八年六月六日	篆韻
文明十六年九月一日	尚書
一月二十二日	論語
二月三日	朱注論語
文明十八年四月十七日	新注孟子
文明十八年九月二十八日	朱氏大全論
文明十六年十一月二十日	四書
文明十七年四月二十一日	新注四書
文明十七年十一月二十九日	篆經
文明八年九月三十日	周易

経部は全部で十三部、その中で出現頻度が高い文献は『論語』九回、『大学』七回、『周易』五回、『莊子』三回である。

史部：	時間	文献
	文明十六年四月二日	元史
	文明十八三月十一日	大明官制
	文明十七年十月二十九日	少微家塾點校附音通節要
	文明八年四月七日	新唐書

史部は全部で四回、頻度が高い文献『元史』四回である。

子部：文明十六年四月七日	醫學大全 事文聚類
八月一日	莊子
文明十七年十月二十三日	奇效良方
文明十八年正月十九日	南遊東販集
二月七日	千金方
四月五日	針灸資生經
四月十九日	醫書大全
文明十八年 四月八日	病原論
七月二十七	救急方
十月二十四	灸經
十月十二日	大明珠玉草帖
文明十六年七月八日	鶴林玉露
文明十七年十月八日	顏氏家訓
十一月十一日	孫氏疏法
文明八年三月二十四	茶經
十月一日	天廚禁臠
文明十八年四月十一日	靈棋經
九月十二日	續感異集

子部は全部で十九部、その中で『千金方』（医学類）七回、『奇效良方』（医学類）七回、『醫書大全』（医学類）五回、『事文聚類』（類書）四回、『灸經』（医学類）三回、『顏氏家訓』（家訓類）三回、『茶經』（医学類）三回である。

集部：文明十六年五月十五日	宋學士文集
八月二日	木天詩話
文明十八年正月二十日	蒲室集
十月十七日	凱歌唱和集
文明十七年二月十二日	潛溪集
閏三月七日	燕石集
四月二十一日	古文集成 東坡詩抄 新刊五百家注音辯 唐柳先生文集
文明十八年三月二十一日	劍南續稿 全室外集
四月八日	五雲漫稿

集部は全部で十三部、その中で頻度が高い文献は『蒲室集』五回、『東坡詩抄』三回、『劍南續稿』三回である。

以上の漢籍は先行研究である陈小法の『「蔗軒日録」與中日書籍交流』の中で列記していた漢籍リストであり、本研究で再度抽出を行った結果である。この日記にも不明な書物は15部がある。

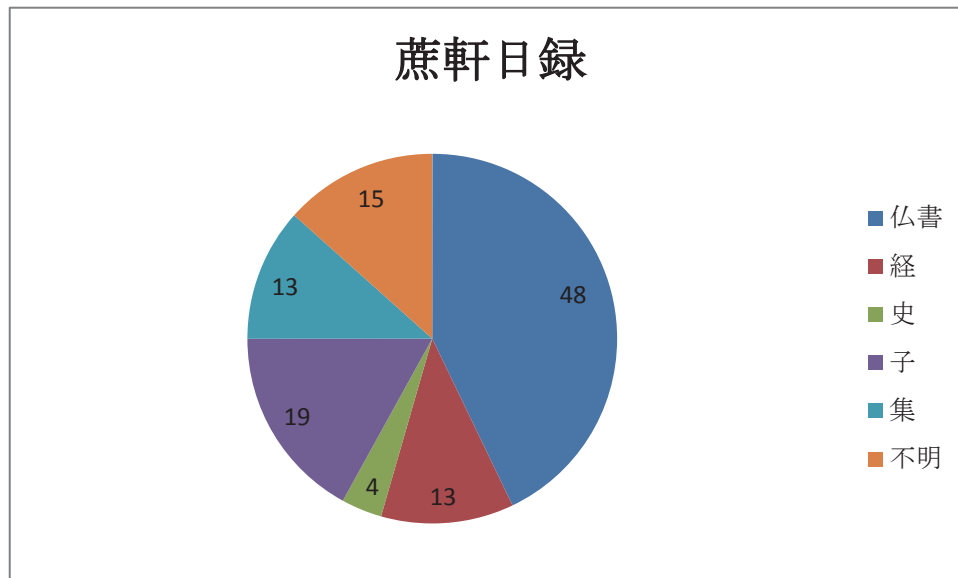


図 2

『蔗軒日録』読書リストと図2から見ると、『臥雲日件録抜尤』の分析で見られたように、外典と内典の割合は半々を占めている。『蔗軒日録』の中の外典は四十九部、内典は四十八部で、内典より外典のほうが多い。

先行研究『「蔗軒日録」與中日書籍交流』は次のように言う。「中国の「禅」の影響を受け、日本の僧侶も「禅」に関する研究を熱心に行っていた。特に六祖慧能、南泉普愿、臨済義玄などの歴史を重視している、仏・菩薩より彼らのほうが評価は高い。五山僧侶たちは紀譚・警語などに対する関心は経書より高いから、『語録』、『碧岩集』、『無門関』などの文献をよく読んでいた。」³⁰ももとは、禅宗は継承のことを重視し、自分の流派を大事にしているため、語録・僧史・僧伝を重んじ、『景德傳燈録』や『禪林寶僧傳』などの漢籍を常に繰り返し読んでいた。

筆者が分析した季弘大叙の日常の漢籍読書から見ても、内典は僧史・僧伝の文献が多い。そのほか、『隆興佛教編年通史』のような編年体の仏教通史も確認できる。また、季弘大叙は室町時代の一流の五山学僧である。諸子百家のものがよく精通しており、朱子学の造

³⁰ 陈小法. 『明代中日文化交流史研究』. 商務印書館, 2011, 2, p245.

詣が深い。日記から見ると、平日の講演でよく『論語』『大学』などの漢籍を弟子に教えていた。たとえば、「文明十六年十二月三日：講朱注侖吾（論語）」、「十二月二十一日：為紹上講大学」³¹などとある。さらに、『蔗軒日録』の中で医書が多く見られるのは季弘大叔が病気になったためであり、それに関わる漢籍をよく読んでいたからである。

2.4 『碧山日録』³²

2.4.1 日記とその作者

『碧山日録』は、室町時代、東福寺の僧正であった雲泉太極の日記である。東福寺の境内に「碧山佳拋」と呼ばれる草庵があり、それが名前の由来となっている。また尊経閣文庫に写本が伝わっている。その記述は長祿3年から応仁2年までに及んでいる。寛正元年、文正元年、応仁二年などの記述が欠落しているものの、長祿～応仁年間に言及した史料は希少であり、また、筆者の立場上寺院の運営、僧侶の仕事や生活に関する記述も見られるため、室町時代後期を検証する史料として貴重である。内容は太極の私生活と、僧侶としての渉外などの公務が中心となっている。古代の名僧の伝記や語録の抜粋や、教典に対する太極の解釈や考証、絵画や書物の鑑賞も含まれている他、詩の覚書にも使われている。文正、応仁の頃の混乱した世情が活写されており、この頃台頭してきた足輕や、下層市民に関する記述が豊富である。中でも山城国木幡郷の郷民の活動や、清水寺の勸進僧が民衆に施した救済に関する記述は注目されている。碧山日録における太極の文体はかなり熟達しており、鮮明な個性と独特の雰囲気醸し出しているが、それゆえに難解な点も多い、太極自身の経歴に不詳な点が多いことも、その難解さに拍車をかけている。³³

2.4.2 『碧山日録』の中の漢籍

以下に列記した漢籍のリストは種類によって分類したもので、出現の頻度は各リストの末尾に記す。

内典（仏書）時間	文献
長祿三年正月二十八日	般若經
二月二十三日	法華一部
五月二十五日	大乘五部
九月二十六日	禪千字文
十月三日	淨書寶渚和尚語録
十一月三日	六學僧寶傳
十一月十八日	僧史略

³¹ 季弘大叔。『大日本古記録-蔗軒日録』。岩波書店、1953、p47-49。

³² 『大日本古記録』版本。

³³ 『世界大百科事典』。平凡社、2007、9。（ja.wikipedia.org/wiki/碧山日録による）

寛正元年二月五日	中峰広録
二月二十四日	広録東語西話
二月二十六日	広録山房夜話
四月二十八日	般若理趣分經
四月二十九日	僧寶正統傳
五月十九日	大藏經目錄
七月二十四日	大乘妙經
寛正二年四月二日	大慧書
四月五日	三十頌集注
十一月九日	碧岩録
二月二十九日	菩薩戒經
十月八日	要集心經注解
三月四日	臨濟抄録
四月十三日	義記
寛正六年正月九日	華嚴經
二月十二日	月藏經
二月二十六日	日藏經
二月二十七日	般若理趣分經
九月十二日	唐僧弘秀集
九月二十六日	諸尊宿語録

日記の中の内典は全部で二十七部、その中で出現頻度が高い漢籍は『般若經』九回、『法華經』八回、『碧岩録』四回である。

外典	時間	文献
經部：	長祿三年二月十三日	論語 孟子 尚書 左氏傳 毛詩
	九月二十四日	千字文

經部は六部、繰り返して読んでいる漢籍は見られない。

史部：	五月三日	漢書
	五月二十八日	司馬遷之傳
	六月九日	前史帝紀
	九月一日	元史節要
	寛正元年六月四日	編年正要
	九月十二日	史記本紀
	寛正二年三月二十一日	唐鑑
	二十九日	宋史 唐史

寛正二年四月七日 史記

寛正三年十一月十二日 魏豹・田儋・韓信傳

史部は全部で十一部、出現頻度が高い文献は『漢書』十回、『史記』六回、『元史』三回だ。

子部：寛正元年三月十日 古今通略

寛正二年正月五日 太平御覽

十一月十二日 聖濟總録

寛正三年三月九日 西山讀書記

應仁二年十月三日 聖宋明賢四六叢珠

闰十月四日 新編古今事類

年十一月十八日 冥官按罪記

子部は全部で七部、出現頻度が高い漢籍は『太平御覽』（類書）四回、『聖濟總録』（医学類）三回である。

集部：六月六日 選詩補注

六月十六日 張御史和唐詩一部

七月七日 李漢集昌黎文序

九月五日 山谷詩集

寛正三年十月九日 蒲室集

集部は全部で五部、経部と同様に、繰り返し読んでいた漢籍は見られない。

この日記の中の漢籍は本研究で新たに検出した結果である。不明な書物は3部あった。

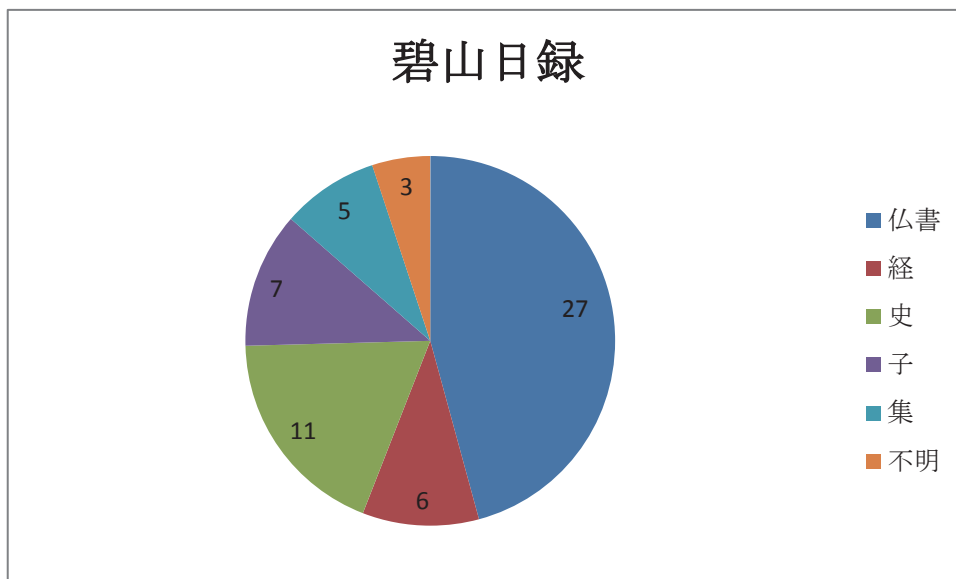


図 3

『碧山日録』の中の漢籍リストと図 3 を見ると、外典と内典の割合も半々となっており、

外典の中で史部の書籍が一番多い、作者は各時代の史書に関心が高かったが、これは作者が生きていた時代が理由と考えられる。当時は応仁の乱によって、社会に秩序が乱れており、歴史の中で何らかの方法を見つけようとしていたのかもしれない。そして、この日記はそれぞれの記事の末尾に「日録云」と称して、記事の要点の摘出と、太極自身の記事に対する感想を述べていることが特徴である。記事の中に書かれた太極の論評には「史記」を初めとする古文書の影響があったと考えられている。

2.5 『空華日用工夫略集』³⁴

2.5.1 日記とその作者

『空華日用工夫略集』は義堂周信の日記である。日記にもいろいろあるが、筆者の義堂は「日常生活における自分の修養工夫を毎日記して、善悪がどれほど多いか少ないかを点検し、自分自身の警めとしたい」と執筆目的を明記している。³⁵「略集」はその名の通り、義堂の日記がすべて掲載されているのではない。元の日記は全部48巻で、現存するものは略本4巻の『空華日用工夫略集』である。その内容は、1325年義堂の誕生から88年の没年に至る64年間の日記の中から、要点を抄出したものである。³⁶

義堂周信は土佐国高岡の生まれで、14歳で剃髪、はじめに台密を学ぶ。後禅宗に改宗し上京し夢窓疎石の門弟となる。このとき「周信」と安名された。延文4年に幕府が関東地方の統治のために設置した鎌倉公方の足利基氏に招かれて鎌倉へ下向し康暦2年まで滞在した。基氏や関東管領の上杉氏などに禅宗を教え、基氏の没後に幼くして鎌倉公方となった足利氏満の教育係も務めた。この間、臨川寺の五山昇位の問題や渡諷経事件³⁷の解決に尽力しその公明正大、厳正中立な態度で各方面に感銘を与えた。帰京後、3代将軍足利氏満の庇護のもと相国寺建立を進言し、建仁寺住職、1386年には南禅寺の住職となり、等持寺住職も務めた。³⁸春屋妙葩や絶海中津と並ぶ、中国文化に通じた五山文学を代表する学問僧である。³⁹

2.5.2 『空華日用工夫略集』の中の漢籍

以下に列記した漢籍のリストは四部分類によって分類したもので、出現の頻度は各リストの末尾に記す。

内典（仏書）時間	文献
貞治六年十二月十九日	佛法繁年録

³⁴ 義堂周信著・辻善之助編。『空華日用工夫略集』。太洋社、1942。

³⁵ 蔭木英雄。『訓注空華日用工夫略集』。思文閣、1983、5、p466。

³⁶ 同上。

³⁷ 円覚寺の仏門教徒、と建長寺の大覚門徒の勢力争い

³⁸ 寺田透。『日本詩人選 24 義堂周信・絶海中津』。1977、p13-20。

³⁹ 入矢義高校注。『五山文学集』。岩波書店、1990、p194-196。

應安元年正月八日	高僧雲無竭傳 宋傳 (宋高僧傳)
七月五日	披廣燈錄 (天聖廣燈錄)
應安二年五月九日	楞嚴經 圓覺經
五月十四日	六祖懷集
七月一日	孟蘭盆經
七月二十四日	虛堂錄
九月十八日	梁高僧傳
十月三日	本願經
應安三年二月五日	梵網經
二十一日	四分律
四月二十五	華嚴五教章
八月二十二日	楞伽經
十一月二十日	傳燈錄
應安四年正月六日	大日經
正月八日	佛祖統紀 大藏經 小藏經
正月十日	華嚴經
二月十四日	僧寶傳說
四月十二日	釋氏資鑑
應安六年四月十七日	天津橋頌
十二月一日	宗鏡錄 林間錄
應安七年二月一日	羅湖野錄
四月一日	貞和集 鐔津文集
永和二年八月五日	傳法正宗記 傳法正宗論
九月一日	楞嚴經疏
永和四年十二月十二日	淨土十三部經
康曆元年四月十日	法華合論
康曆二年五月十八日	禪錄詩書文集
十二月二日	五部大經教
永德元年二月三日	大般若經
七月二十五日	禪儀外文
永德二年六月十九日	法華藥王品
六月二十二日	大惠長書 法華經
九月十四日	楞嚴經 碧岩集
永德三年四月二十二日	六祖壇經

至徳二年五月二日	百丈清規
至徳三年四月二十五日	金剛經纂要
十月十一日	枯崖漫録

この日記の中で内典は全部で四十七部、その中で出現回数が高い文献は『楞嚴經』十五回、『孟蘭盆經』十回、『華嚴經』十回、『圓覺經』八回、『宋高僧傳』七回、『碧岩集』五回、『貞和集』五回であった。

外典	時間	文献
經部：	應安四年九月二日	尚書
	應安七年十月八日	孝經
	康歴二年八月七日	中庸
	十一月六日	孟子
	永徳元年二月二十九日	論語輔教編
	九月二十二日	程朱新義
	十二月二日	大學
	十二月三日	周易
	十二月十七日	禮記
	二月十八日	魯論
	永徳三年五月二十四日	禮記集説

外典の中で經部は全部で 11 部、出現頻度が高い漢籍は『中庸』八回、『尚書』五回、『禮記』四回である。

史部：	應安元年十二月二十八日	前漢晁錯傳（史記）
	應安二年追抄二月十日	前漢尹齊傳（漢書）
	應安四年五月十日	左氏傳
	應安五年十一月十日	保寧璣傳
	二月十日	貞觀政要
	應安七年十一月三日	漢霍光傳
	永和元年十月二十五日	史記
	康歴二年九月十日	晉書

史部には、全部で八部、その中で『貞觀政要』は五回、『史記』四回だ

子部：	應安二年追抄二月十日	桐君藥録 雷公藥録 太平廣記
	正月十三日	孫吳兵法 太平御覽

應安五年十一月八日	拾遺記
永和二年三月十五日	事文類聚
永和四年十一月七日	壽親養老新書
永徳二年正月十一日	莊子
康歴二年九月十日	山海經

子部には全部で十部、その中で出現頻度が高いのは『太平御覧』（類書）八回、『事文類聚』（類書）五回、『太平廣記』（小説類）三回である。

集部：應安元年九月二日	三體詩法
應安三年八月七日	和夔府詩
應安四年四月二十日	編年通論 北碯石門
應安五年四月二十八	玉屑詩
永和四年十二月六日	六臣注文選
康歴二年十二月十三日	三體集序
永徳元年九月七日	儒學文談
永徳三年五月二十四日	詩學大成

集部は全部で九部、繰り返して読んでいる漢籍は『六臣注文選』五回、『玉屑詩』三回である。

この日記の中の漢籍はすべて本研究で新たに抽出した結果である。そして所属不明の書物は10部がある。

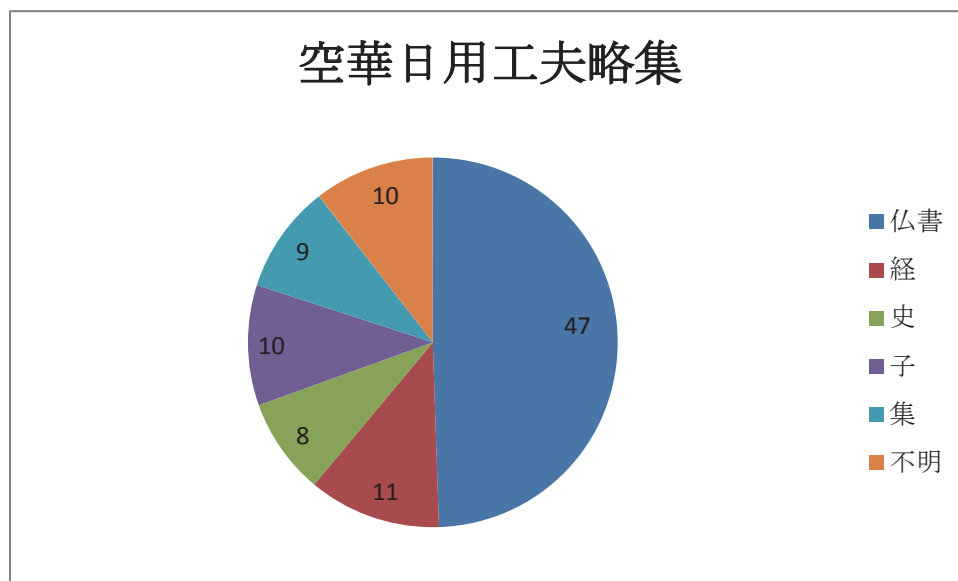


図 4

『空華日用工夫略集』の漢籍読書リストと図4を見ると、仏典が多く割合を占めていることが分かる。しかし、経・史・子・集各部分の書籍については、前述した三つの日記ほどはっきり傾向は見られず、ほぼ平均的に読んでいたことが明らかになった。そして、『太平御覧』と『事文類聚』は類書、つまり事典であり、これらは子部の中でも出現頻度が高かった。

『太平御覧』は前代以来の代表的な類書であったが、そのほかに『事文類聚』がしばしば利用されている。大庭氏は「この室町の五山僧侶の時代に、いわば『太平御覧』から『事文類聚』へ転換してゆくだらうと思っているのである」⁴⁰と述べた。しかし本研究の調査では、『空華日用工夫略集』だけではなく、前述した三つの日記の中でも『太平御覧』の出現頻度が『事文類聚』よりかったため、五山僧侶は『太平御覧』を多く使っていたということが明らかとなったと言える。

⁴⁰ 大庭 脩. 『漢籍輸入文化史-聖徳太子から吉宗へ』. 研文出版, 1997, p86.

3. 明代の読書

3.1 明代の文化環境

明代の洪武帝は、元朝の異民族支配を倒して漢人の王朝を復活させた。中央集権を強めると同時に文化についての専制・統一の政策を押し広げていった。建国当時から、洪武帝は「明教化以行先聖之道」を公布し、「孔孟之道」と朱子学によって、人たちの思想を統一、世論をコントロールしようとしていた。また儒学の地位を高めるために、洪武帝は朱子学の学者を重用し、彼らを国家政策の解決、礼学制度の制定、文化教育の建設などに参加させた。科挙⁴¹の内容はすべて『四書』『五経』の中から出題され、その中心は朱子学だった。陈梧桐によって「国子監が「國家明經取士，說經者以宋儒傳注為宗，行文者以典實純正為主，不尊者以違制論」（国家は経を明らかであることを基準に士を取り、経を説くものは宋の儒者の伝注をもととし、文を作ることは故事を踏まえ純正であることを主とする。これ尊ばんしものは、制に違ふとする）各地方の儒学の学校に命令した。」⁴²と指摘している。

洪武帝は儒学を提唱した以外に、仏教、道教も推賞した。仏教、道教によって皇帝の権力の神聖性を強めた。洪武帝は仏僧の出身で、仏教に関することを重視し、大規模な仏教活動を行った。仏教の影響力を拡大させるために、洪武帝は名僧に命じて、『大蔵経』を校正させ、自らは『心経』の序文を作った。そのほか、道教、キリスト教も重んじていた。その後、世宗、武宗、孝宗も宗教に力を入れており、仏教、道教を提唱した。それと同時に、「異端邪説」を禁じた。『孟子』の中には「民貴君輕」の言論があったため、洪武帝は孔廟の中の孟子の位牌を取り除いた。その後、元に戻したが、『孟子』における民主主義の内容を削除し、『孟子節文』を編纂した。

明代の学校は官僚の養成機関であり、文化思想を伝播する重要な場所であった。明代の最高の教育機関は国子監と呼ばれて、そこに入ることのできる者の大部分は貴族であり、一般人が官僚になるには科挙を受けることが必要だった。官僚になることは封建社会で出世する唯一の道であった。「朝廷は人々が何を読むのかについて厳しくコントロールしており、『四書』『五経』『大明律令』と洪武帝が自ら編纂した『御制大誥』二編を必修課程と決めていた。…」⁴³科挙は八股文⁴⁴で合格するかどうかを評価した。「これは、思想の自由を制限する厳しい形式であり、自分の感情・思想も自由に表現することができなかった。そのうえ、テーマは『四書』『五経』からの内容で、内容の解釈は朱子学派の「注」を基準とし行文は必ず古人をならわなければならない。」⁴⁵このようなしっかりと固定さ

⁴¹ 官僚試験

⁴² 陈梧桐. 『中国文化史—明代卷』. 中共中央党校出版社, 1996, p12-13.

⁴³ 同上, p14-15.

⁴⁴ 中国の明や清の時代に、科挙の答案として用いられた特殊な文体のことである。四書五経の中から出題された章句の意味について、対句法を用いて独特な8段構成で論説した。

⁴⁵ 王龍. 『明代科挙対閱讀活動的影響』. 陰山学刊 Vol. 24, No4, Aug. 2011, p23-26

れた規定に従って文章を書くことで、思想や感情を自由に発揮し、十分に表現することはできなくなった。

儒学に関する書物の編纂は多く行われたが、そのほかに、類書の大作も現れた。それは『永楽大典』である。『永楽大典』は七、八千種の書籍をもとに編纂した中国の歴史上に先例のない類書である。民間文学は、明初の朝廷の思想統一政策の圧力によって、それほど多くなかったが、いくつかの大著が現れていた。『三国演義』『水滸伝』はこの時期の代表作である。

3.2 明代の読書人と読書傾向

3.2.1 明代の読書人

読書人というのは昔、中国で、士大夫或いは学者・知識人のことを指している。⁴⁶中国の読書人は必ずしも科挙を目的として読書していたわけではないが、科挙は読書人の大きな目標であり、官僚になる唯一の手段であった。よく知られているように、科挙は隋朝の時に始まった。三年ごとに、優秀な人材が都に集まり、科挙に参加して進士に合格した者が官僚となる。科挙が始まった当初から、読書人は読書、受験、官僚を緊密に繋がれた。読書は受験のためのものであり、合格したら官僚となって、名誉や富を得られる。当初の科挙は文章を作るだけだったが、唐代の時に詩賦が追加された。宋代からは、儒学に限り、明代になるとさらに『四書』『五経』、特に朱子学『四書大全』『五経大全』が注目された。読書人の関心はそこに集中し、ほかの書物についてはあまり注目されていなかった。⁴⁷

科挙制度は読書人に自由・公平な出世の道を提供していた。しかし、明代になるとこの試験は読書範囲を厳しく規定した。王龍の「明代科挙対閲読活動的影響」は、一般人が科挙を受験するために読まなければならない書物は概括すると四つの内容があると述べている。

①朝廷が(標準テキストとして)規定していた『四書五経大全』とその注疏。

②性理方面の書物、たとえば『性理大全』と同時代の人を書いた経書を注釈する書物。たとえば、『四書』に関する注釈の書物は「白文」「集注」「旁注」「大全」「纂書」「通考」「通典」「浅説」「通証」「音考」「句解」「辑釈」「發明」「章図」などがある。…

③試験の模範解答或いは八股文の選本。それは、昔、受験の中の優秀な文章を選らんで、評論を加えて編纂した書物である。八股文の選本は一番人気がある書物だ。…

④受験指導のようなアンチョコに類する書物である」⁴⁸と述べた。

ここで指摘しておくべきことは一つ：何俊良の『四友齋叢 卷三』は「明代の科挙は受験の人たちの読書内容を制限したが、その範囲はすごく広く、名物、典籍、性理、処事、

⁴⁶ 秦娜。「論生活在科挙制度下的読書人」。『魅力中国』。河南省人民廣播電台、2010. 6, p33-34.

⁴⁷ 王余光。『読書四観』。湖北辞書出版社、1997, p72.

⁴⁸ 王龍。『明代科挙対閲読活動的影響』、陰山学刊 Vol. 24, No4, Aug. 2011, p23-26.

記言、記事など、「天下輿地、禮樂、兵・農、帝王損益升降」⁴⁹すべてを含める…。それで、これらの項目を修めて、高度な教養を身につけなければならない。いろんな書物を読みあさらなければならない。必ず「比貫穿經史，包羅古今，周 查明體達用」（經史に広く通じ、古今を網羅し、事情を調べ、体と用とに通達しなければならない）」⁵⁰である。と述べている。 科挙においては読解力と記憶力が主に求められていたため、『四書』『五經』の暗記は基本であり、そのほか、唐・宋の古文、唐詩、名人の時文、史書、詩韻においても一定数読まなければならなかった。そのため、科挙は人々の読書の熱意を強く起こした。「萬般皆下品，惟有讀書高」は社会的な価値傾向になった。

しかし、前節で述べた通り、明代の科挙には大きな欠点が存在した。儒学、特に性理学と八股文の形式にこだわっていたため、それらを中心に読むことで官僚に成ろうとしていた人々の読書範囲が狭められ、能力の向上と学術の革新が停滞した。科挙を受ける人々は、聖人の經典や昔の儒学者の注疏、先代の歴史などではなく、科挙を受けるための時文に関心を持った。つまり、読書はすべて科挙のために行われていた。

読書人の中にはこの読書の傾向に反対する者もいた。たとえば、範統は科挙を受験せず、經史、工詞詩賦、音律に関心を持ち、たくさんの名作を残った。そのほか、鄭元錫も科挙を受験せず、著述に熱中し、『五經』に関する著作が多く表した。範統、鄭元錫のように、自分自身の読書の悟道や「聖人の心」を追求した人々は、明代の学術発展のうえで中核の役割を果たした。

3.2.2 明代人の読書傾向

前節では明代の読書環境や読書の目的について述べた。本節では、明代の読書に関する指南書から抜き書きした読書傾向に関する記録を用いて、明代の読書傾向を分析する。

まずは『程氏家塾読書分年日程』である。作者である程端礼は元末有名な教育家であった。この書物は元代の読書範本として学校に公布施行され、明・清の時代も強く推賞され、読書の基準と認められていた。以下は読書の基準に関する記述の引用部分である。

「八歳未入學之前，讀《性理字訓》……

自八歳入學之後，讀《小學》。……《小學》書畢，次讀《大學》經傳正文，次讀《論語》正文，次讀《孟子》正文，次讀《中庸》正文，次讀《孝經》刊誤，次讀《易》正文，次讀《書》正文，次讀《春秋》經並《三傳》正文……

自十五志學之季，即當尚志，為學以道為志，為人以聖為志。自此，依朱子法讀《四書》注，……《大學章句或問》畢，次抄讀《論語或問》之合于集注者，次抄讀《孟子或問》之于合注者，次讀《本經》……

四書本經即明之後，自此日看史，看《通鑿》《綱目》；兩漢以上，參看《史記》《漢書》

⁴⁹ 同上。

⁵⁰ 王龍。『明代科挙対閱讀活動的影響』。陰山学刊 Vol. 24, No4, Aug. 2011, p23-26.

唐參《唐書》範氏《唐鑒》…

讀韓愈文章, 讀《楚辭》⁵¹

訳：八歳入学前に、「性理字訓」を読む。

八歳入学した後、『小学』、『小学』の後『大学』の経伝正文、そして、『論語』の正文、そして『孟子』の正文、『中庸』の正文 『孝經』の正文『易』の正文『書』の正文、そして、『儀礼』と『礼記』の正文、『周礼』の正文、次は『春秋』『三伝』の正文である。

十五歳以降、学問は「道」を目指し、人柄は聖人を目指す。それから、朱子の方法に従って『四書』を読む、『大学章句或問』を読む。次は『論語集注』『孟子集注』『中庸章句或問』を読む。次は、『論語或問』の集注に合わせた部分を読む、『孟子或問』の合注に合わせた部分を読む。次は『本経』である。

四書と本経を明らかになった後、その時から史書を読む、まず『通鑑』『通鑑綱目』；兩漢以前は『史記』『漢書』、唐代に関しては『唐書』と范氏の『唐監』

韓愈・柳宗元の文章を読む、『楚辞』を読む

以上としかない、子供のごろからまず『小学』次は『四書』『五経』その後史書、最後に文集などを読むと規定されているといえる。

次に『宋学士全集』を挙げる。作者である宋濂は明初の有名な文学家で、洪武帝に重用された人物である。宋濂の出身は貧しかったが、読書に勤しんで高官になった。著作の中で読書を勧める記事がよく見られる。以下は、その中で、読むべき書物に関して書かれた記事である。

「治古之時、非唯道德純一、而政教修明、至于文學之彥、亦精贍宏博、足以為經濟之用。蓋自童卯之始、十四經之文、晝以歲月、期于默記。又推之于遷、固、範之書、豈直覽之！其默記亦如經。基本既正、而後遍觀曆代之史、察其得失、稽其異同、會其綱紀、知識益且至矣。而又參于秦漢以來之子書、古今撰定之集錄、探幽索微、使無遁情。于是道德性命之奧、以至天文地理、禮樂刑兵、封建郊祀、官職選舉、學校財用、貢賦戶口征役之屬、無所不詣其極；或廟堂之上、有所建議、必旁引曲證、以白其疑、不翅指諸掌之易也。自貢舉法行、學者知以摘經擬題為志、其所最切者惟四子壹經之箋、是鑽是窺、余則漫不加省、與之交談、兩目瞪然而視、舌本強不能對。嗚呼、一物不知、儒者所恥。孰謂如是之學、其能有以濟世哉！」⁵²

訳：安定した古代の社会では道德が純一なだけではなく、政治と教育もよく整えられ、文章を書く人たちの知識も広く深く、経世済民の役に立てていることができる。

子供ころから十四経のような書籍に対して計画的に暗記するようにする。そのあと、『史記』、『漢書』、『後漢書』といった史書である。これらの書籍は、読むだけではなくて、経書のように暗記しなければならない。そうすると基本が正しい、これから各時代

⁵¹ 程端礼. 『程氏家塾読書分年日程』.(曾祥芹. 『古代閱讀論』. p326 による)

⁵² 宋濂. 『宋学士全集』.(王余觀. 『読書四観』. p307 による)

の史書を読んで、その得失を洞察し、異同を検討して、重要なところを把握できるようになる。このようにすると、自分の知識も見方も豊かになり、極められる。そのあと秦漢以来の子部書籍、古今の学者たちの文集、雑録など、これを読んでその中の深くて隠された知識を理解し、漏れがなくなる。これによって、道德性命の奥義から、さらに天文地理、礼楽刑法・兵制、封建・郊祀の制度、官職・選挙、学校・財政、賦役・戸籍などの内容に及ぶまで到らないところがないようにする。朝廷の中で、皇帝に進言する時、自分の掌を指すように簡単に引用でき、疑問を正すことができるようになる。

科挙の制度が出現した後、読書人たちは経書の抜き書きと科挙の問題を推測することを目標として努力していた。彼らが一番重要だと考えたのは「四子一経」の注釈であり、よく研究して、ほかの種類書籍に注意しない、彼らと話した時、目を見張って舌が硬くて答えることができない。一事でも知らないことがあれば、儒者は恥とする。このような学問が世間を治めるだろうか。

引用された部分は、子供の頃から十四経のような書籍を暗記できるようにし、そのあと、司馬遷と班固、範晔が書いた史書、最後には秦漢以来の子部書籍、歴代の学者たちの文集、雑録などを読むという読書傾向を表している。

次は『焦弱候澹园集』を挙げる。作者である焦竑は明万暦年間の状元で、皇帝の子供の先生をしていた、明代の著名な思想家である。特に文史、哲学を専門としていた。彼の著作『焦弱候澹园集』の中で読書傾向に関する部分を以下に引用する。

「荊州唐先生于載籍無所不窺 其編纂成書以數十計。常語其徒曰：“讀書以直徑明理為先；次之諸史，可以見古人經綸之迹；又次則載諸世務，可以應用資者。數者本末相裨，皆有益之書，余非所急也。”所輯最巨者，有《史纂左編》、《右編》、《諸儒語錄》、《詩編》、《文編》、《稗編》，凡六種。」⁵³

訳：荊川の唐先生が読まない本はない。彼が編纂した本は何十冊もある。読書とは「まっすぐに経学を通じて理を明らかにする。世間の道筋を明らかにすることが一番重要である。次は、各種類の史書であり、史書を通じて古人の国家を治めてきたやり方を見られる。次は、各種の事務的な書籍である。このような書籍によって、世間で生きるうえで守なければならないことについて参考となる。これ何種類書籍の本末はお互いに結んでいて、人に有益な書籍である。ほかの書籍はあまり重要ではない。」と、彼は弟子にいつもそう言っていた。彼が編纂した著作は『史纂左編』『右編』『諸儒語録』『詩編』『文編』『稗編』の十六種類である。

引用した部分は、経書を研究し、その後は、各種類の史書、最後に、事務的な書物を研究することが重要であるという読書傾向について述べている。

最後に『思辨録』を挙げる。作者である陸世儀は明末清初の有名な教育家であり、有名

⁵³ 焦竑. 『澹园集』.(王余觀. 『読書四観』. P305 による)

な書院（学校）の先生を務め、読書理論を提出した。彼は読書を三つの段階を分けて、各段階でどのような書物を読むべきか、重要な点はどこかについて詳しく論じた。ここで彼の読書理論の成果を紹介する。

「書籍之多，千倍于古，學非博不可，然汗牛充棟，將如之何，偶思得壹讀書法，與將所讀之書，分為三節，自五歲至十五歲為壹節，十年誦讀；自十五歲之二十五歲為壹節，十年講貫；自二十五至三十五為壹節，十年涉獵。使學友漸次，書分緩急，則庶幾學者可由此而程功，朝廷亦可因之而試士矣。所當讀之書，約略開列之後。

十年誦讀：

《小學》（文公《小學》頗繁，愚欲另編《節韻幼儀》）。《四書》（先讀正文，後讀注）。《五經》（先讀正文）。《周禮》（柯尚遷者佳）。《太極》、《通書》、《西銘》。《綱目》（先讀編。又有《曆世通譜》、《秋警錄》等書，載古今興亡大概，俱編有歌括，易先講讀）。古文（宜先讀《左傳》、其《國策》、《史》、《漢》、八大家，文理易曉，易于記讀，俟十五歲後可也。予近有《書鑒》壹編，專取古文中之有關於興亡治亂者，後各為論，使學者讀之，可知古今。似可備覽）。古詩（《離騷詩》、陶詩、宜先讀。予近有《詩鑒》壹編，專取漢唐以後詩之有合于興觀群怨者，後各為論。似可備覽）。各家歌訣（凡天文、地理、水利、算學諸家，俱有歌訣。取其切于日用者，暇時記誦。

十年講貫：

《四書》（宜看《大全》）。《五經》（宜看《大全》）。《周禮》（柯尚遷注，近有《集說》，亦好）。《性理》（尚宜重輯。

內如《洪範皇極》、

書，俱以各自為書，不必入集）。《綱目》（宜與《資治通鑒》、《紀事本末》二書同看，仍以《綱目》為主）。本朝事實。本朝典禮。本朝律令（三書最為之今之要）。《文獻通考》

（此書與《綱目》相表裏，不可不講）。《大學衍義》、《衍義補》（理學、經濟類書之簡明者，不可不講）。天文書（宜專學曆數）。地理書（宜詳險要）。水利、農田書（有新刻《水利全書》、《農政全書》）。兵法書（《孫子》、《吳子》、《司馬法》、《武備志》、《紀效新書》、《練兵實紀》、俱宜講究。按：以上四家，苟非全才，或專習壹家即可）。古文（《左》、《國》、《史》、《漢》、八大家）。古詩（李、杜宜全閱）。

十年涉獵：

《四書》、《五經》、《周禮》（以上參看注疏及諸家之說）。諸儒語錄。二十壹史。本朝實錄及典禮、律令諸書。諸家天文。諸家地理（各省《輿地志》，或旁家及堪輿家）。諸家水利農田書。諸家兵法。諸家古文。諸家詩。

以上諸書，力能兼著兼之，力不能兼，則略其涉獵而專其講貫。又不然，則去其詩文。其于經濟中或專習壹家，其余則斷斷在所必讀，庶學者俱為有體有用之士。今天下之精神，皆耗于貼括矣，誰肯為真正讀書人，而國家又安得收讀書人之宜哉？」⁵⁴

⁵⁴ 陸世儀。『思辨錄』。（王余觀。『読書四観』。P379-381（による）

訳： 今の書籍の多いことは古代の千倍にもなる、読書は広く行わなくてはいけない、だが、こんなにたくさんの書籍のなかからどのように選択するべきか、わたしは偶然に一つの方法を見つけた。人の年齢を三段階に分けた。第一段階は、五歳から十五歳までで、声に出して読み、暗記すべき本である。第二段階、十五歳から二十五歳までで、研究すべき本である。第三段階、二十五歳から三十五歳まで、広く読むべき本である。このようにして、順を追って、書籍の重要度を分けて読めば、学ぶものも計画を経立て読書ができ、朝廷もこれによって官員を選ぶことができる。私たちが読むべき書籍は大体以下の挙げる通りである：

第一段階に閲読し暗記すべき本：

実際のところ、『小学』はとても複雑なので、私は別に『節韻幼儀』を編纂するつもりだ。『四書』（先に正文、後で注）『五経』（先に正文）『周礼』（柯尚遷の注が一番）『太極図説』『通書』『西銘』『綱目』（先に『通鑑綱目前編』次は『歴世通譜』『秋繁録』など、每部コツがある、さきに読むべき）。古文（先に『左伝』、次は『戦国策』『史記』『漢書』である。唐宋八家の文章は分かりやすく暗記し易いから十五歳以降に読んでもよい。私が最近『書鑑』という書物を編纂した。古代の文章の中の国家興亡に関する内容を取って、毎章の最後に私自身の論を付けた、学生たちが読めば、古今のことが知ることができるので、用意してください。）古詩（『離騷』と陶淵明の詩は先に読みすべきだ。最近私が編纂した『詩鑑』は漢唐以来の比興、観覧、聚合、怨恨などの詩をそろって、每部分の最後も私自身の見方も付いているので、参考にできる）各家の歌訣（天文、地理、水利、算数など、自分の歌謡を持っている、日常生活に特別の作用がある。暇な時に暗記してください）

第二段階に研究すべき本：

『四書』（『四書大全』を読むべき）『五経』（『五経大全』を読むべき）『周礼』（柯尚遷の版本と『集説』がいい、最近の『集説』もよい）『性理』（組み立て直しが必要があるその中の『洪範皇極』『律呂新書』『易学啓蒙』『皇極経世』などは独立の本になれるはず、集中しなくても大丈夫）『綱目』（『資治通鑑』と『通鑑紀事本末』を結んで読むべき、もちろん『綱目』は柱である）本朝の史実。本朝の法典と礼儀。本朝の法令（三書は今の世界を理解することが役に立てた）『文献通考』（この本と『綱目』はお互いに表裏、必ず読んでください）『大学衍義』『大学衍義補』（この二つは理書、世間を治める書籍の中でいいのもので、読まなければならない）天文書（歴法を研究すべき）地理（陰要類のものに注目すべき）水利、農書（新しい『水利全書』『農政全書』）兵法書（『孫子』『呉子』『司馬法』『武備志』『紀效新書』『練兵実紀』などが重要だ。全部理解できないなら、必ず一つを研究すべき）古文（『左伝』『戦国策』『史記』『漢書』と唐宋八家の文章）古詩（李白、杜甫の詩すべてを読んでください）

第三段階に広く読むべき本：

『四書』『五経』『周礼』（各流派の観点と注を全部読んでください）諸儒の語録。二十一史。本朝の実録と典法、礼儀、法令などの書、諸家天文の志書。諸家の地理書（各省の『輿地志』と堪輿家）。諸家の水利、農書、兵法、古文、詩歌なども読んでください。

以上の書籍はできれば全部読んでください。もしきないならば、すべてにざっと目を通して、講演と研習に集中してください。もしこれもできないならば、古文と詩歌を捨てて、『経刻済民』類の中で一家に集中してください。ほかのものもできれば読んでください。こうすれば人材になるかもしれない。今の読書人はすべての精神を科挙の準備することに集中して、だれがほんとの読書人になりたいか、国家が読書人のいいところがどう受け取るか。

引用した部分によると、人生の各段階で読むべき書物の種類、その順序が決まっていた。始めは、経部の儒書で、次は史部の史書、集部の文集、最後に子部の雑家類の書物という順序だった。この順序から作者が四つの分類の中で何を重視していたかも明らかにした。経部が最も重要であり、次は史部、集部、最後には子部が重要だったと言える。

3.3 明代僧侶の読書

第二章で述べたように、日本の僧侶はたくさんの漢籍を読んでおり、漢籍を大切にしていた。また内典だけではなく、外典も読んでいた。次に、同じ禅宗僧侶であった中国の僧侶たちはどんな書物を読んでいたのか、その中でどんな傾向が現れているか、そして、日本の五山僧侶と比べて、どのような特色があったかについて論じたい。本節では明代の僧侶はどんな漢籍を読んだのかに関する調査結果について述べる。明代の禅僧の随筆から、明代の僧侶の読書傾向について分析する。

3.3.1 『山庵雑録』とその中の漢籍読書傾向

『山庵雑録』は作者である怒中無愠が天童の山庵に隠退ののち、宋の『羅湖野録』『雲臥紀談』にならって、当時の禅宗の逸話を集録したものである。洪武八年（1375）に『山庵雑録』を完成させた。死後まもなく弟子玄極居頂が刊行している。無愠は、足利義満が日本に招こうとした人であり、中世禅林への影響は大きい。『山庵雑録』には、作者が遊歴した時に、見聞きしたことや、先輩との交流などについて記録されている。その特色は、禅林の名作について自分の評論を加えているところである。

※書名の後の数字は出現した回数である。

『山庵雑録』で確認された漢籍

仏書：僧寶傳 3 大藏尊經 2 法華經 3 傳燈錄 華嚴經 金剛經 2 晉唐宋三代高僧傳 金剛般若經 3 楞嚴經 3 維摩經 圓覺經 宗門綱要 2 梵經大惠書 叢林公論 2 禪林寶訓 陸放翁普燈錄 2

経部：周易 2 心經 孝經

史部：元史 2

子部：羅湖野錄 莊子

集部：太白文集

リストを見ると、随筆の中で出現頻度が一番高い仏書は『法華經』、『金剛般若經』、『楞嚴經』、『僧寶傳』で、それぞれ三回確認できた。外典の中では『周易』と『元史』が各二回見られる。

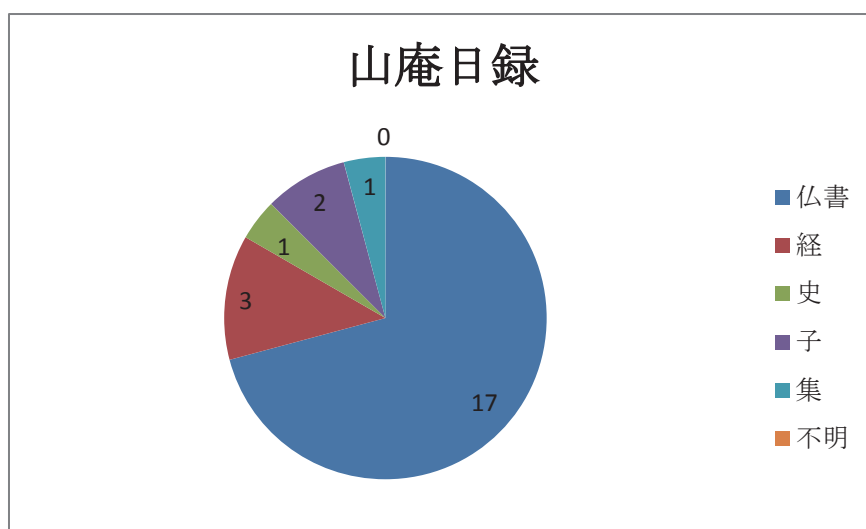


図 5

図 5 と漢籍リストから見ると、中国の僧侶の読書は主に仏典で、外典が少なく、そして、内典の中では『法華經』などの経書が主流であることが分かる。しかし、日本の僧侶の読書傾向を見ると僧史・僧伝が多い。

3.3.2 『竹窓随筆』とその中の漢籍読書傾向

『竹窓随筆』は、白隠慧鶴禅師が愛読した『禅関策進』の著者として知られる雲棲株宏の随筆集であり、全 3 巻、計 427 条からなる巨編である。⁵⁵ 中国江南地方の仏教は、宋末から元代を経て明初に至るまで、国家の手厚い保護もあり、五山十刹を中心にして隆盛を誇っていたが、明代、永楽帝が首都を北へ移して以降、見る影もなく衰退していった。その状況を打ち破り、明代末期に仏教の隆盛をもたらした最大の功労者が雲棲株宏である。彼は、仏教の基礎とも言うべき戒律を復興させ、修行法としての禅と念仏を鼓吹し、教学をも駆使して、雲棲寺(浙江省杭州钱塘県)で教化活動を繰り広げた。⁵⁶ 株宏が雲棲で実

⁵⁵ 雲棲株宏. 『竹窓随筆』. 中国書店, 2007, p531-542.

⁵⁶ 同上.

施していた法要規範は、清代初期の禅宗にも大きな影響を与えた。その株宏が見た当時の仏教界の有り様を、理非曲直を明らかにしながら自ら記した書物が、この『竹窓随筆』である。⁵⁷

※書名の後の数字は出現した回数である。

『竹窓随筆』で確認された漢籍

仏書：般若心經 3 楞嚴經 14 華嚴經 9 華嚴經疏 2 無量壽經 8 法華要解 法華文句
法華玄義 梵網經 3 天台小止觀 圓覺經 3 悟道集 傳燈錄 3 宗鏡錄 念佛鏡
阿彌陀經 7 法華經 12 大般若經 四十二章經 2 文殊問經 密嚴經 六祖壇經 孟
蘭盆經 金剛經 4 仏遺教經 禪門口訣 2 續元教論 釋氏要覽 百丈清規 2 楞嚴
會解 五燈會元 景德傳燈錄 洛陽伽藍記 碧岩集神僧傳 皇極經書

經部：孟子 6 尚書 2 禮記 2 中庸 5 大學 3 詩經 3 論語 4 書經 3 毛詩 易經 11 大學章
句

史部：なし

子部：太極圖說 顔氏家訓 周氏紀言 肇論 3 山海經 老子 老子清靜經 道德經 南華
經 真皓 莊子 3 春秋左氏傳 2

集部：寒山詩

この随筆の中で確認された書物は、内典では『楞嚴經』十四回、『法華經』十二回、『華嚴經』九回、『無量壽經』八回、『阿彌陀經』七回、『金剛經』四回である。外典の中で經部が一番読まれており、『易經』十一回、『孟子』六回、『中庸』五回、『論語』四回、『大學』三回、『詩經』三回、『書經』三回が確認された。子部の書籍は二番目、その中で『莊子』三回、『春秋左氏傳』三回見られた。

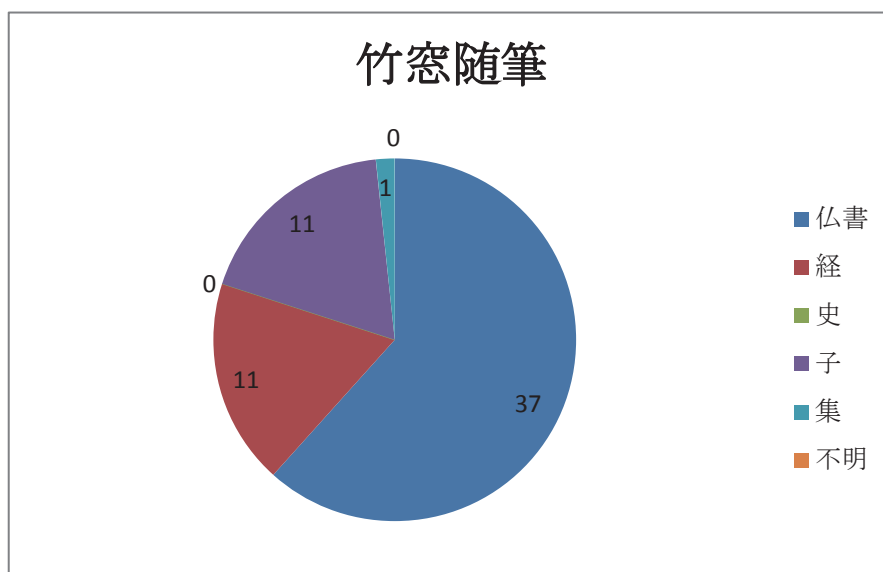


図 6

⁵⁷ 同上.

図6を見ると、この随筆の中の漢籍は仏典が一番多く、これは僧侶の本職に関わるものである。そして、経部の儒学書、子部の老荘、道家の書物が次に続く。また前項で分析を行った『山庵雑録』の漢籍リストからは各種類の書物がすべて確認できたが、『竹窓随筆』では史部の書籍が見られなかった。

そのほかに、『竹窓随筆』には読書傾向に関する記録がいくつかあり、それは以下の通りである。

「近時於渚涇大都不用注疏。夫不泥先入之言，而直究本文之旨，誠為有見，然因是成風，乃至逞其胸臆，冀勝古以為高，而曲解僻說者有矣。新學無知反為所誤。且古人勝今人處極多，其不及者什一。今人不如古人處極多。其勝者百一，則孰若姑存之。喻如學藝者，必先遵師教以為繩矩，他時后日，神機妙手，超過其師。誰得而限之也。而況乎終不出於古人之範圍也。

訳：近年は經典についてもおおむね「先人の」注疏を参考にしない。先に耳に入った言説に拘泥しないで、じかに「經典」本文を究めるとするのは誠に見識のあることである。けれども、そのために、「注疏を参照しないのが」風習となり、自分勝手な見解を振り回し、古人をさげすんで偉ぶろうとするあまり、ねじれ片寄った解説をする者があらわれるまでになっている。初学者は、何も分からないで、かえって間違わされてしまっている。それに、古人が今の人に勝る点が誠に多い。今の人に及ばない点は、十分の一である。今の人が古人に及ばない点が誠に多い。古人に勝る点は百分の一程である。どうすれば、しばらく古人の注疏を採用したほうがよかつたろう。たとえば、芸道を学ぶものは、必ず先ず師匠の教えに導かれてそれを手本とし、五日驚きくべき機知と絶妙な手腕で、その師匠を追い越すようなものだ。「これは自然の成り行きであり」だれが「その進歩を」制限できようか。そうして古人を追い越そうとあくせくする必要があるだろうか「このようにすぐれた者でさえ手本よらなければならぬのだから」まして古人の技量の範囲を越えずじまいのものは、なおさら「手本によらなければならぬの」である。」⁵⁸とある。

この記述を見ると、作者は先人の注疏を推賞していて、經典を読むときは、先人の注疏を参考にしたほうがいと述べている。そして、今の人よりも古人を尊敬し高く評価している。さらに、この随筆の中で、作者自身が論じた仏教者はどんな書物を読むべきかに関する記録もあり、それは以下の通りである。

「華嚴具無量門。諸大乘經，猶是華嚴無量門中之一耳，華嚴，天王也。諸大乘經，封侯也。諸小乘教，封侯之附庸也。餘可知矣。

訳：『華嚴經』の「教え」は無量の法門を具えており、諸々の大乘經典は華嚴に具わった無量の法門の中の一門に過ぎない。「たとえてみれば」『華嚴經』は天王であり、諸々の大乘經は諸侯であり、諸々の小乘經はその属国である。それ以外の「外典の」書籍は推してし

⁵⁸ 雲棲株宏. 『竹窓随筆』. 中国書店, 2007, p25.

られよう。」⁵⁹とある。

この記述から、仏経の中で『華嚴経』を推賞していたことが分かる。外典はあまり重視していない。

「末法僧有習書習詩習尺牘語。而三者皆士大夫所有事。士大夫舍之不習而習禪，僧顧攻其所舍而於己分上一大事因緣置之度外。何顛倒乃而。

訳：今日、末法の僧侶には、書道や詩文や書簡文を習う者がいる。だが、この三つはどれも、士大夫がたしなむはずのことである。その士大夫がそれらを放り出して禪を習い、僧侶たちが逆に、かれらの放り出したものを修めて、自分自身の一大事因縁には目もくれないでいる。何と逆様になっていることだろう。」⁶⁰とある。

「今時僧有學老莊者，有學舉子業經書者，有學毛詩楚辭及古詩賦者。彼以禪為務。但外學未絕，尚緣此累道。今肆意外學而禪置之罔聞，不知其可也。

訳：今の時代の僧には、老子や莊子を学ぶものもいれば、科擧の学を学んで儒教經典に取り組む者もいれば、『詩經』や『離騷』さらには古代の詞や賦を学ぶ者もいる。彼は禪を本来の務めとした。ただ仏教以外の学問と手が切れてなかつたので、これが悟りのさまたげになったのである。今、仏教以外の学問をしたい放題にして、禪はほったらかしにした見向きもしないならば、よいはずはないであろう。」⁶¹とある。

以上の二つの記述を見ると、作者は僧侶たちが仏典を読まずに、外典を学ぶことを反対している。しかし、作者の随筆から様々な漢籍が見られることを考えると、外典を読んでおり、それは当時の主流だったのではないかと考えられる。

「儒仏二教聖人，其設化各有所主。固不必歧而二之，亦不必強而合之。何也。儒主治世，仏主出世。治世則自應如大學格致誠正修齊治平足矣。而過於高深，則綱常倫理不成安立。出世則自應窮高極深方成解脫。而於家國天下，不無稍疏。蓋理勢自然，無足怪者。若，而謂儒即是仏，則六經論孟諸典，璨然備具。何以釋迦降誕，達摩西來。定謂仏即是儒，則何不嚴楞法華理天下，而必假儀農堯舜創制於其上，孔孟諸賢明道於其下。故二之合之，其病均也。雖然、円機之士，二之亦得，合之亦得，兩無病焉。又不可不知也。

訳：儒教と仏教の聖人は、その教化を設けるのにそれぞれ主とする所がある。もちろん、はっきり二つに区別する必要もないし、また無理に「一つに」合致させる必要もない。どうしてかといえば、儒教は世間を治めることを主とし、仏教は世間を超出することを主としているからである。世間を治めるには、もともと『大学』にある「格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下」の通りにすれば十分である。とはいえ「その理屈があまりに」高深に成りすぎると、「人間が実践すべき」綱常論理が成立しなくなる。「これに対して」世間に超出するには、もともと高深を極めてこそ解脫が成就されるのである。だ

⁵⁹ 雲棲株宏. 『竹窓随筆』. 中国書店, 2007, p55.

⁶⁰ 同上, p81.

⁶¹ 同上, p125.

が、家や国・天下のことについては、やや疎遠にならないわけにはいかない。思うに、「それは」道理の自然な勢いであって、怪訝におもうまでもないことである。もし「儒教は儒教にほかならない」と言い切るならば、『詩経』『書経』などの「六経」や『論語』『孟子』といった古典がりっぱに備わっているのであるから、そうして釈迦の降誕や達磨の西来を持つ「必要がある」か。「また」「仏教は儒教にほかならない」と言い切るならば、どうして『楞嚴経』や『法華経』で天下を治めないで（聖人である）伏羲・神農・堯舜が上古に（治世の）制度を創め、孔子・孟子といった諸もろの賢者たちが、その後をついで道義を明らかにする必要があるのであろうか。だから、（儒教と仏教を）二つにするのも（一つに）合致させるのも、その病は均しいのである。とはいえ、円満な機根をそなえた士は、二つにしてもよいし、合致させてもよい。どちらでも病がないのだ。（このことも）よくわきまえておかねばならない。」⁶²とある。

「儒者之學、以六經論孟等書為準的。而老莊乃至仏經禁置不學者、業有專攻。其正理也。為僧亦然。乃不讀仏經而讀儒書。讀儒書尤未不可、又至於讀老莊、稍明敏、又從而註釋之。又從而學時、學文、學字、學尺牘。種種皆法門之衰像也。弗可挽矣。

訳：儒者の学問は、六経や『論語』『孟子』などの書物を手本としている。そして「道教の『老子』『莊子』及び仏教の經典については、「儒者がそれを」禁止しておいて学ばないのは、そもそも「儒者には儒者の」専門として修め習うものがあるからである。儒書を読むは当然の道理である。けしからぬことではない、僧侶もまた同じである。「今日の僧侶は」仏教の經典を読まずに儒書を読んでいる。儒書を読むのは、それでもまだ悪くはない。さらに『莊子』『老子』までよみ、少しばかりかしこい者、さらにそれに注釈をつけている。そのうえ、詩を学び、文を学び、書道を学び、書簡文を学んでいる。どれも皆仏道の衰えた兆候である。」⁶³とある。

この二つの記述によると、当時の僧侶が仏典を読まず、儒学さらに老莊の学問に関心を持っていた。この状況について考えを述べている。仏典と儒学は対立するものではない、もし能力があれば、両者を読んでも構わないが、もしできないなら、各自がやるべきことを認識しなければならない。僧侶が仏典を差し置いて、儒学を読むことは本末転倒であると述べた。

⁶² 雲棲株宏。『竹窓隨筆』。中国書店、2007、p304。

⁶³ 同上、p367。

4. 五山僧侶と明代人の読書状況の比較

第二章では、五山僧侶の日記から漢籍を抽出することで、漢文学家としての五山僧侶の漢籍読書状況を明らかにした。第三章では明の読書指南書を通じて明代の人々の読書状況を明らかにした。また明代の僧侶の随筆から書籍を抽出することで彼らの読書状況についても検討を加えた。四章では、この二つの読書状況をまとめ、比較し、それぞれの読書傾向とその違いについて明らかにしたい。

まず、五山僧侶の読書状況について表1を作成した。

書名	総数	仏書	経	史	子	集	不明
臥雲日件録抜尤	133	63	10	13	19	24	4
蔗軒日録	112	48	13	4	19	13	15
碧山日録	59	27	6	11	7	5	3
空華日用工夫略集	95	47	11	8	10	9	10

表1

四つの日記の作者は仏僧であるが、表1によると、仏典だけではなく、経・史・子・集各部類の漢籍をすべて読んでいたことが分かる。仏典は全体の半分以上を占めている。仏典では僧史・僧伝が多く、それは僧侶の本職に関する書物としてよく読まれていた。また外典の中でもそれぞれの傾向が現れていた。『臥雲日件録抜尤』には、集部の中でも特に文集が多く記録されており、陸遊の『劍南續稿』、蘇東坡の『東坡詩注』や『文選』などの詩文集、『北磻文集』などの仏僧の文集もあった。『蔗軒日録』については、子部の中でも漢籍特に医書が多く確認できた。これは、作者が晩年病に侵されていたため、これに関する書物を読んでいたためだろう。そして、『碧山日録』によると、史部の書籍（つまり歴史に関する書籍）が一番読まれていた。これは作者が生きていた時代が理由と考えられる。当時は応仁の乱によって、社会に秩序が乱れており、歴史の中から何らかの方法を見つけようとしていたのかもしれない。『空華日用工夫略集』では、外典は傾りなく読まれており、大きな特徴が見られなかった。

そして、以上の読書傾向は、共通する特色も持っていた。一つは類書を重視している点であり、『太平御覧』と『事文聚類』は四つの日記の中で多く見られる。二つ目は、明代の鄭若曾『籌海図編』で日本人の漢籍に対する愛好について「五経則重書禮而忽易詩春秋，四書則重論語學庸而惡孟子，重佛教而五道經，若古醫書每見必買，重醫故也」（五経は『尚書』『礼記』を好み、『周易』『詩経』『春秋』を軽視する。四書は『論語』『大学』『中庸』を好み、『孟子』を軽視する。また仏典を重んじて道経を無視し、医書を見たら必ず買う）と述べられていた点である。確かに、分析を行った結果、『五経』の中で『尚書』と『礼記』の出現回数はほかの三つより高かったが、『四書』の中で『孟子』もよく見られる。鄭若曾の「悪孟子」はあまり見られなかった。三つ目は、医学類の書籍である。『蔗軒日

録』の作者は自身の病が原因でよく医学類の書籍を読んでいたが、ほかの三つの日記の中でもいくつかの医学の書籍が見られる。これは鄭若曾も「若古医书每見必买，重医故也」と述べていた。四つ目は仏僧が書いた文集がよくみられる点である。たとえば『浦室集』と『北磻文集』がある。

第三章では、明代の読書の指南書から引用した読書傾向に関する記述から明代の読書状況を明らかにした。まず、科挙の影響が非常に強かったため、読書する際には、必ず儒書を読むことが記されていた。儒書の中でも、『四書』や『五経』が重視されていることが分かる。そのほか、史部の中では、『漢書』『史記』が重要な地位を占めていた。その次は、文集であり、子部類の書籍はどちらの引用の中でも最後に読む部類に入れられる。

次に、読書人の読書状況と明代の僧侶の読書状況を比較する（表2を参照）。

書名	仏書	経	史	子	集	不明
竹窓随筆	37	11	0	11	1	0
山庵日録	17	3	1	2	1	0

表2

僧侶の読書は、表2によると、主に仏書が読まれていたが、そのほかは経部の書籍で、史部書は一回しか見られない。子部の書籍は、老荘以外のものはほとんど読まれていなかった。この点は、五山僧侶と異なっており、五山僧侶は各部類の書籍すべてを読んだ。そして、読む仏書の中でも『法華経』『楞嚴経』のような経書が多く、僧史・僧伝はほとんどなかった。五山僧侶の日記の中では、確認できなかった『阿彌陀経』と『無量壽経』などの仏典もよく見られる。そして、『竹窓随筆』の作者は、随筆の中で、古代の文章と今の文章の優劣について書いており、また、仏僧がなにを読むべきか、さらに仏教と儒教の関係についても論じている。作者によると、古代の文章は今より優れており、仏僧は自分の役割を果たした上で儒典を読むことについては構わない、仏教と儒教は対立する関係ではないと述べた。作者が述べたことは、当時の中国の禅林の読書傾向を反映していると考えられる。

五山僧侶と明代の人々の読書傾向にはどのような違いがあるかについて以下の結論をまとめた。

1. 僧侶両方の読書比較

- ① 内典と外典の割合から見ると、明代の僧侶は内典を多く読んでいるが、五山僧侶は内典と外典をほぼ同じ割合を読んでいた。読書傾向から見ると、五山僧侶は史部・子部・集部を、明代の僧侶は仏書・儒書をよく読んでいた。
- ② 仏典の中では『楞嚴経』『法華経』『般若心経』などがよく読まれていた。経典は両国の僧侶が同じように重視している。明代の僧侶よりも五山僧侶の方が僧史・僧伝を重んじており、『伝僧録』や『神僧伝』などを読んでいる回数が多い。そ

して、明代の僧侶は特に経書を重んじており、『無量壽經』『阿彌陀經』などの五山禅僧の日記で現れなかった経典を中国の僧侶はよく読んでいる。

- ③ 外典では、『碧山日録』の作者が史部の書籍、特に『史記』と『漢書』をよく読んでいた。『蔗軒日録』の作者は子部の医書を重視していた。また、『臥雲日伴録抜尤』の作者は文集を好んで読んでいた。しかし、中国の『山庵日録』と『竹窓随筆』の中では儒学と仏書以外はほとんど読んでいない。
- ④ 最後に五山僧侶が読んでいる書籍は唐宋時代のものが多い。それは、伝来するには時間がかかるということについても考慮しなければならない。しかし、『元史』のような明初で編纂され書物については、五山僧侶の日記の中でも見られる。

2. 五山僧侶と読書人の読書比較

- ① 五山僧侶は、様々な部類の漢籍を大量に読んでいた。仏書以外に儒書、史書、文集、さらに老子と荘子の書物も読んだ。中国の科挙によって、読書人の主な読書の対象は儒書であり、特に明代の科挙は『四書』からテーマを出していたことから、明代の読書人は『四書』『五経』に関心を持っていた。そのため、当時の名人は幅広い読書を勧めていた。
- ② 五山僧侶は、積極的に漢籍を収集し、それを読む活動をしていた、珍しい漢籍を見つけたら、必ず手に入れようとした。
- ③ 五山僧侶は唐宋時代の各部類の書物を多く読んでいたが、明代の人々は科挙に制限され、当時の「時文」に関心を持ち、古人の書物或いは注疏についてはあまり読んでいなかった。

5. おわりに

五山僧侶たちは中国伝来の禅を修得するために漢語・漢文・漢詩に通じることは必要なことではあったが、彼らの学問は禅宗の悟道へ導く言語表現とは対極にあった。漢文学を文芸として受容し、自らも創作してこの時代の文芸一翼を担った。勘合貿易を開始した幕府にとって、彼らは使者として、中国の禅僧と詩文をもって交流し、外交場面において貴重な存在となった。五山僧侶は、室町時代に漢文学に一番深く接した人々なので、彼らの日記をもとに漢籍に関する読書を研究することは、漢籍がどのように日本で受容されたのかを考える上で重要なことである。

大庭氏によれば、文化の伝播の方式は二種類がある。一般的に文化を伝えるのは、人と書物である。この両者の間には違いがある。大庭氏は「日中文化の交流において、人物の交流は極めて多く、また有効なものであった。たとえば、江戸時代初期の黄檗僧隠元の来日などはそのよい例である。…黄檗禅の伝来という主たる意味のほかに、生きた人間の持つ広がり、生活者としての文化を、付帯して伝えるのである…。一方、書籍の場合は、生身の人間のような広がりはないが、生命が長いという特色があると思う。」⁶⁴と述べた。文化の伝播に関しては、人物に関する研究が多く、書籍に関する研究は多くに見られない。

本研究は五山文化の隆盛期の四つの日記を調べて、僧侶の日常的な読書状況から当時の日本では中国文化を受容する傾向があったことを明らかにした。また、同時期の明代の人々の読書状況と比較し、それぞれの読書傾向の特色についても検討した。まず、五山文学の隆盛時期の四つの日記の中から漢籍を抽出した。そして、外典と内典を分け、外典の部分は中国の四部分類法によって分類し、その中で頻度が高い漢籍の種類を明らかにした。また、明代の読書状況を明らかにするため、明代の読書指南書から読書状況に関する内容を抽出し、明代の一般人の読書状況を調べた。さらに、明代の僧侶の随筆（日記）についても、五山僧侶と同様の方法を使って、読書状況を検討した。最後に明代の僧侶と五山僧侶の読書状況を比較し、それぞれの傾向を明らかにした。

しかし、今回の研究で、日記の中の漢籍が四部分類の何部何類に所属するかについては、大部分の漢籍解明できたが、一部の漢籍については、日記に出てくる書名からのみでは度の書籍を指しているのか特定できず、従って所属についても解明できなかった。また、明代の僧侶・知識人の読書傾向との比較を行って、一応傾向は指摘できたが、明代の僧侶についての資料が不十分であった。それらの資料を探し出して検討することが今後の課題である。

⁶⁴ 大庭 脩. 『日中文化交流史叢書-典籍』. 大修館書店, 1996, p5.

謝辞

本研究を進めるあたり、非常に多くの方にご指導ご鞭撻いただきました。本論文の作成にあたり、指導教官の松本浩一先生には有益なご指導、ご助言を賜りました。また論文を完成するまでに、ご助言や励ましを下さった綿抜豊昭先生、そして、着手発表・中間発表などを通じて、図書館情報メディア研究科の諸先生方にも多くの貴重なご助言をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。

参考文献

1. 陈小法. 「『臥雲日件録抜尤』与中日書籍交流」. 『明代中日文化交流史研究』. 商務図書館, 2011, p189-239.
2. 陈小法. 「『蔗軒日録』与中日書籍交流」. 『明代中日文化交流史研究』. 商務図書館, 2011, p239-274.
3. 王龍. 『明代科举対閲読活動的影響』. 陰山学刊. Vol. 24, No4, Aug. 2011, p23-26.
4. 東京大学東洋文化研究所図書室編. 『はじめての漢籍』. 汲古書院, 2011, p6.
5. 秦娜. 「論生活在科举制度下的読書人」. 『魅力中国』. 河南省人民广播电台, 2010. 6, p33-34
6. 伊藤幸司. 「外交と禅僧—東アジア通交圏における禅僧の役割」. 『中国—社会と文化』. 中国社会文化学会, 24 Jul. 2009, p41-70.
7. 小島毅. 「五山文化研究への導論」. 『中国—社会と文化』. 中国社会文化学会, 24 Jul. 2009, p181-194.
8. 京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター. 『漢籍はおもしろい』. 研文出版, 2008, p1-10.
9. 雲棲袞宏. 『竹窓随筆』. 中国書店, 2007, 574p
10. 大庭 脩. 『漢籍輸入文化史—聖徳太子から吉宗へ』. 研文出版, 1997, p63-93.
11. 王余光. 『読書四観』. 湖北辞書出版社, 1997, 2, 409p
12. 大庭脩・王勇. 『日中文化交流史—典籍』. 大修館書店, 1996, p5-81.
13. 陈梧桐. 『中国文化史—明代卷』. 中共中央党校出版社, 1996, p5-23.
14. 曾祥芹. 『古代閲読論』. 河南教育出版社, 1992, p326
15. 入矢義高校注. 『五山文学集』. 岩波書店, 1990, p194-196.
16. 鄭梁生. 『元明時代東伝日本の文献』. 文史哲出版社, 1984, p53-129.
17. 蔭木英雄. 『訓注空華日用工夫略集』, 思文閣, 1983, 5, 498p
18. 寺田透. 『日本詩人選 24 義堂周信・絶海中津』. 1977, p13-20.
19. 玉村竹二. 『五山文学 - 大陸文化の紹介者としての五山僧侶の活動—』. 至文堂, 1966, p1-92.
20. 木宮泰彦. 『日華文化交流史』. 富山房, 1962, p602-624.
21. 瑞溪周鳳. 『大日本古記録—臥雲日件録抜尤』. 岩波書店, 1953, 294p.
22. 季弘大叔. 『大日本古記録—蔗軒日録』. 岩波書店, 1953, 318p.
23. 太極. 『大日本古記録—碧山日録』, 岩波書店. 1953, 227p.
24. 義堂周信著. 辻善之助編. 『空華日用工夫略集』. 太洋社, 1942, 188p
25. 程端礼. 『程氏家塾読書分年日程』. (曾祥芹. 『古代閲読論』. p326 による)
26. 宋濂. 『宋学士全集』. (王余観. 『読書四観』. p307 による)

27. 陸世儀. 『思辨録』. (王余観. 『読書四観』. p379-381 による)
28. 焦竑. 『澹園集』. (王余観. 『読書四観』. p305 による)